

神戸大学大学院

人間発達環境学研究科 2017

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University



What is Human Development?

人という始源、 地球という舞台。

Contents

研究科長からのメッセージ	3	人間発達専攻	16
研究科のポリシー	4	人間環境学専攻	24
研究科の構成	5	修士論文と博士論文	29
研究科の教育	6	進路・資格免許	31
研究科の特色ある研究	8	入試日程・データ	32
大学院生の研究活動	10	沿革	33
社会貢献・地域貢献	11	アクセス	33
国際学術交流	14		

研究科長からのメッセージ

21世紀、世界では科学技術の急速な進化を背景に高度情報化やグローバル化が急速に進み、人類のさらなる発展が期待できる状況にあります。反面で、この動きは価値観の衝突や富・知識の偏在をもたらす要因にもなり、その結果、世界のいろいろな地域で人間の自由な発達を阻害する事態が発生しています。わが国でも、少子高齢化が急速に進むなか、経済や雇用の状況が必ずしも安定せず、そのため、一人ひとりの人間が潜在的にもつ多様な能力を発現する場が狭められているという指摘もあります。

こうした状況を踏まえ、私たちには、持続可能な社会の創造を目指し、「人間の発達 (human development) とは何か」「それはどうすれば可能か」という根本的な問いと向き合い、より実践的な観点から具体的な解を導くことが強く要請されています。むろん、容易な課題ではありません。人間の発達を真に捉えるためには、人間それ自身だけでなく、人間をとりまく環境にも注意深く関心をいだし、人類の叡智を集結しながら多面的かつ重層的に研究していくことが求められるからです。

人間発達環境学研究科は、まさにこの課題に応えるため、2007年4月に設立されました。本研究科は、「ヒューマン・コミュニティ創成研究」という理念に基づいて、文系・理系の理論を融合した学内外にある様々な知見を総動員し、総合的・実践的な観点から人間発達研究に新たな学問的地平を拓くことを目的とした大学院です。「ヒューマン・コミュニティ創成研究」とは、地域社会、行政、企業、NPO、NGO、市民など学外の多様な行為主体と密接に連携しながら、人間的な社会 (ヒューマン・コミュニティ) の創成をめざす教育研究活動の総体を意味します。

そして、この理念を具体化するため、本研究科の教育研究活動は次の三つの特色をもっています。

第一に、それは学際的・総合的であるという点です。

複雑さを増す現代社会がかかえる解決困難な課題に対峙していくためには、専門の深化だけでなく、幅広い観点から持続可能な社会を展望し様々な科学を包摂していく「学術の総合力」が必要となることは、しばしば指摘されることです。

本研究科では、人間の発達を一人ひとりの人間の「善き生 (well-being)」を実現するために個人や集団が潜在的にもつ多様な能力を開花させることと理解し、その視点から個々の専門領域を結びつけ、今日的な諸課題に対し多面的・総合的・包括的にアプローチする「人間発達環境学」を構築しています。

第二に、それは実践的・応用的であるという点です。

本研究科では、現代社会に生起する様々な問題につき、直接の当事者と協働して実践を試行しながら有効な解決方法を探求し、その成果をもとに解決プログラムを開発するアクションリサーチの手法を基本にすえ、既存の学問領域を越えた新しい実践知の創造を目指しています。特に研究科附属の発達支援インスティテュートでは、「大学と地域とを結ぶプラットフォーム」として学生・教員がこの手法を使い実践的な活動を広範に進め、教育と研究と社会貢献を一体的に進めています。

第三に、国際的であるという点です。

近年、大学のグローバル化が急速に進み、本研究科においても、海外の大学との学術交流が進んでいます。特に人間の発達とそれをとりまく環境に対する眼差しは、人々が実際に生きる場に起きる身近な問題に端を発しながら、しかし同時に、今日の国際社会において解決すべき喫緊の諸課題とも深くつながっています。本研究科では、いくつかの具体的テーマを掲げ、海外の学生、研究者、実践家等と問題意識を共有しながら調査研究や学術交流を進めるスタディツアーを積極的に実施し、教育研究の国際化を推進しています。

「人間発達環境学」はまだ始まったばかりですが、人類の諸課題と対峙する壮大な学問的プロジェクトともいえます。私たちは、教員と職員、そして学生諸君が一体となって、このプロジェクトに挑戦していきたいと考えています。熱意あるみなさんが、この学問共同体に参加されることを強く期待します。

人間発達環境学研究科長
岡田 修一 教授



研究科のポリシー

人間発達環境学研究科は、人間の発達やそれを取り巻く環境に関わる基礎的並びに応用的・実践的な教育研究活動に主体的に参加し、これを推進する指導的役割を担える高度な専門的能力を有する人材、そして創造性及び卓越性を発揮しうる研究能力を備えた人材の養成をめざします。

■ アドミッションポリシー (求める学生像)

本研究科は、次のような資質・能力を持った学生を積極的に受け入れます。

- 高度な研究を遂行していくための基礎的な資質・能力
- 人間の発達や環境に関する諸問題に対する鋭敏な感受性と深い専門知識にもとづいて新しい課題を析出していく資質・能力
- 多角的かつ重層的に課題を分析・考察し、体系的に概念化と理論化を行うことができる高度な知的能力
- 現代的諸問題を解決するための具体的方策を提案し、柔軟に対応できる行動力

■ ディプロマポリシー (学位授与に関する方針)

博士課程前期課程

- 【学位授与の要件】 本研究科の教育目的に沿って設定された授業科目を履修し、基準となる単位数を修得し、修士論文の審査及び最終試験に合格することが、学位授与の要件です。
- 【取得できる学位】 修士(学術)、修士(理学)、修士(教育学)
- 【課程修了の目安】 人間の発達やそれを取り巻く環境に関わる基礎的並びに応用的・実践的な教育研究活動に主体的に参加し、これを推進する指導的役割を担える高度な専門的能力が備わっているかが、本研究科での課程修了の目安となります。
- 【学生の達成目標】

人間発達専攻

多様な側面を持つ人間それ自身の発達を総合的な視点から学び、人間の発達に関する実践的諸課題の解決と新たな公共的知見を創出できる創造的な研究能力、及び高度な専門的学識と実践能力を身につけます。

人間環境学専攻

人間の発達を支え、助け、促すための環境のあり方について、多様な学問分野を横断する幅広い研究視点・方法を身につけるとともに、専門分野に根ざした応用力と、問題解決のための実践能力を獲得します。

博士課程後期課程

- 【学位授与の要件】 本研究科の教育目的に沿って設定された授業科目を履修し、基準となる単位数を修得し、博士論文の審査及び最終試験に合格することが、学位授与の要件です。
- 【取得できる学位】 博士(学術)、博士(理学)、博士(教育学)
- 【課程修了の目安】 人間の発達やそれを取り巻く環境に関わる基礎的並びに応用的・実践的な教育研究活動に主体的に参加し、これを推進する指導的役割を担える高度な専門的能力、そして創造性及び卓越性を発揮しうる研究能力が備わっているかが、本研究科での課程修了の目安となります。
- 【学生の達成目標】

人間発達専攻

多様な側面を持つ人間それ自身の発達を総合的な視点から学び、人間の発達に関する実践的諸課題の解決と新たな公共的知見を創出できる創造的な研究能力、及び高度な専門的学識と実践能力を身につけます。

加えて、自身の研究を自立して進め、共同研究さらには学際研究を企画・組織する力を有するとともに、新しい研究領域の開拓に挑戦できる能力を身につけます。

人間環境学専攻

人間の発達を支え、助け、促すための環境のあり方について、多様な学問分野を横断する幅広い研究視点・方法を身につけるとともに、専門分野に根ざした応用力をそなえ、問題解決のための実践能力を獲得します。

加えて、自身の研究を自立して進め、共同研究さらには学際研究を企画・組織する力を有するとともに、新しい研究領域の開拓に挑戦できる能力を身につけます。

研究科の構成

人間発達環境学研究科は、以下の専攻と附属施設で構成されています。

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科

人間発達専攻

こころ系講座

心理発達基礎 (P18)

健康発達 (P19)

表現系講座

表現創造 (P20)

表現文化 (P20)

からだ系講座

身体行動 (P21)

行動発達 (P21)

学び系講座

教育科学 (P22)

子ども発達 (P22)

発達支援 (P23)

【前期課程の特別な履修コース】

- 臨床心理学コース (P18)
- 発達支援 1 年履修コース (P23)

人間環境学専攻

環境基礎論講座

自然環境 (P26)

数理情報環境 (P27)

環境形成論講座

生活環境 (P27)

社会環境 (P28)

環境先端科学 (後期課程の連携講座) (P26)

【前期課程の特別なサブコース】 ● ESD サブコース

発達支援インスティテュート (P11)

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

教育連携推進室

心理教育相談室

アクティブエイジング研究センター

サイエンスショップ

研究科の教育

■ 教育の特色

博士課程前期課程

人間の発達やそれを取り巻く環境の発展に関わる基礎的あるいは応用的・実践的な教育・研究活動に対し、学生の主体的参加を促し、高度な専門的能力を備えた人材の養成をめざしています。このため、本研究科では、個々の学生が在学中のあらゆる機会を通じて知識、スキル、能力、資質とそれらの自己開発力を獲得できるよう、学生の「学び」をトータルにプロデュースし支援する体制をとっています。以下のような特色をもつ、能力開発支援型の教育プログラムを提供します。

徹底した基礎的・実践的教育

研究科共通科目「特別研究I」において、文献調査法や資料収集法、フィールドワークやアクションリサーチの技法など、研究の基本的手法を修得し研究能力の基礎を固めます。さらに「特別研究II」において、研究の実際の場面に関わることで、研究遂行のための実際的手法を修得します。

個々の学習課題に応える積み上げ方式の専門教育

全般的な専門力量の形成を支援するために、各専攻では専攻共通科目（人間発達専攻では「人間発達総合研究I・II」「人間発達相関研究」「人間発達研究」、人間環境学専攻では「人間環境学相関研究」）を置いているほか、個々の研究課題に応じたコースワークが可能となるように、基礎科目「特論」、展開科目「特論演習」及び関連する専門科目から構成される、積み上げ方式のカリキュラム構成をとっています。特に「特論演習」では、スキル開発を重視します。

複数教員による指導体制

本研究科では、主指導教員1名のほかに副指導教員2名をおき、副指導教員には、異なる専門分野でありながら学生の研究内容に関連する領域の教員があたるように配慮しています。これらの教員間の協議に基づき綿密な研究指導を行うことで、高い専門性ととともに幅広い視野を備えた独創性・創造性をもつ人材を養成します。

(注) 地球規模の環境破壊や、エネルギーや水などの資源保全の問題など、人々が現在の生活レベルを維持しつつ、次世代も含む全ての人々により質の高い生活をもたすことができる社会づくりが重要な課題になっています。これを解決するため、国連で決議された「持続可能な開発のための教育」のことを ESD (Education for Sustainable Development) といいます。

ヒューマン・コミュニティ創成のマインドを醸成する教育

研究科共通科目「ヒューマンコミュニティ創成研究」において、発達支援インスティテュート (p.11を参照) を活用した産学官民協働のフィールド研究活動に積極的に参画し、それらの活動を通して、ヒューマン・コミュニティ創成のマインドを醸成します。

ソフトスキルや社会人基礎力の育成

専攻レベル、講座レベルで実施される諸活動（研究集会、セミナー、修士論文発表会など）において、「参加」「運営」といった役割を担うことにより、コミュニケーション能力、ネゴシエーション能力、企画力、マネージメント能力、チームワーク力、リーダーシップ力といったソフトスキルや社会人基礎力の育成を支援します。

持続可能な開発のための教育

「持続可能な開発のための教育 (ESD = Education for Sustainable Development) ^(注)」の理論と実践について学ぶことを目的にした ESD サブコースを設置しています。本研究科のすべての学生が、主専攻に加えて選択できるコースです。環境、人権、開発、防災、経済など、多様な課題の解決について、教育の観点から考究し行動することのできる国際人の育成を目指しています。このサブコースの修了生には、「ESD Advanced Practitioner」の認証が付与されます。

博士課程後期課程

人間の発達やそれを取り巻く環境の発展に関わる原理的あるいは応用的・実践的な教育研究活動に対し、学生の主体的参加を促し、高度な専門的能力だけでなく、独創的で卓越した研究能力を備えた人材の養成をめざしています。そのため、本研究科では、以下の特色をもつ教育プログラムのもとで、学生が、自らの専門を深めるだけでなく、多角的かつ相対的に捉えることにより、自らの専門のアイデンティティを練り上げることができる高度な学問的能力を身につけます。

専門力量を深化させる教育

さらなる専門力量の深化をめざした高度化科目（「特論II」）を展開します。

実践的研究能力に磨きをかける教育

研究科共通科目「特別研究III」において、文献課題やレビュー論文の作成などを通して、国内外の研究状況を把握するための能力発展をめざします。研究科共通科目「特別研究IV」では、フィールドワークやワークショップ、研究会、プロジェクト研究などの企画・運営に参画し、研究を組織化する方法を修得します。また、国際レベルの論文作成能力を養成します。

体系的な博士論文作成指導システムの提供

前期課程、後期課程の計5年間で円滑に博士論文を作成できるようにするため、複数教員による体系的な論文作成指導システム（基礎論文、予備審査論文、公開最終試験）を採用しています。

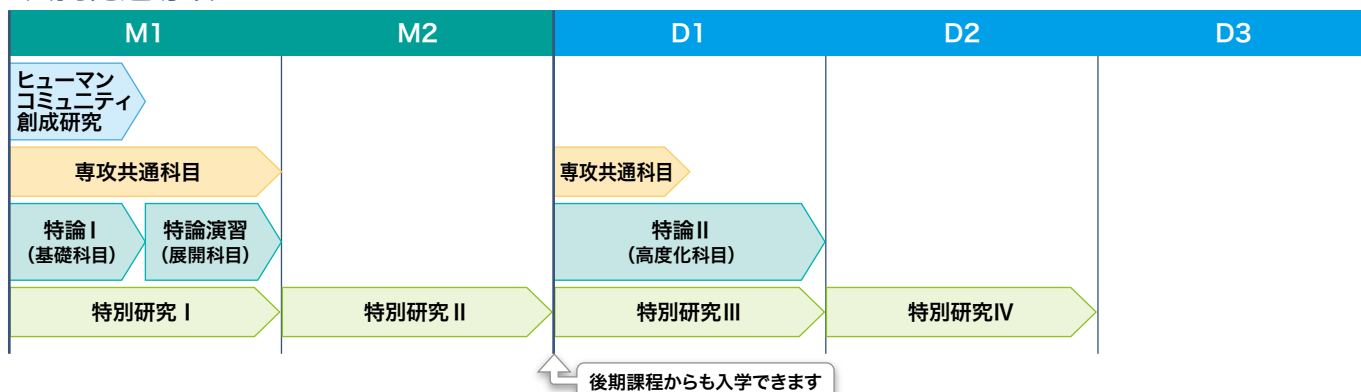
実践的な教育力の開発支援

大学教員をめざす学生に対して、学部教育実習に相当する科目「教育能力養成演習」を設置し、実践的な教育力の開発を支援します。

■ カリキュラムの流れ

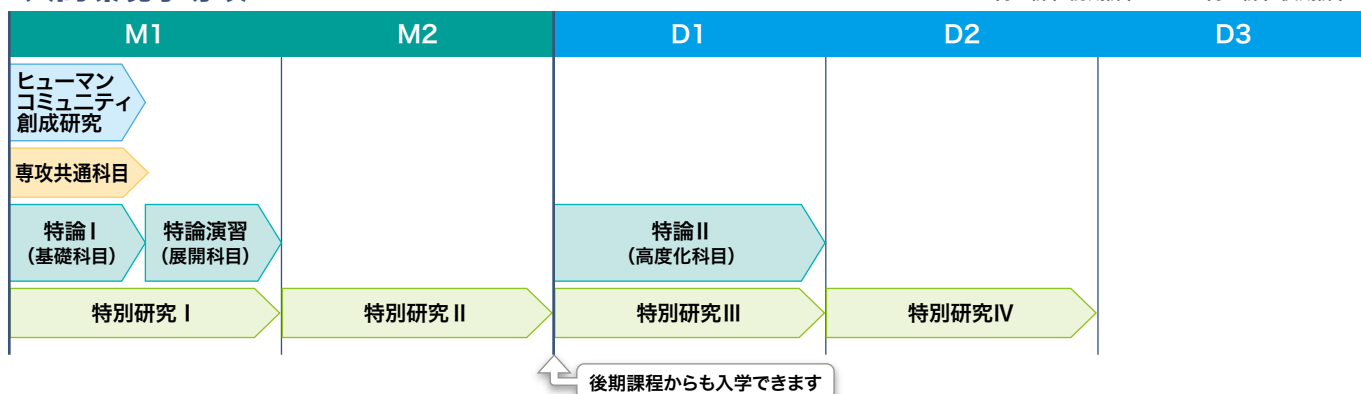
人間発達専攻

M: 博士課程前期課程 D: 博士課程後期課程



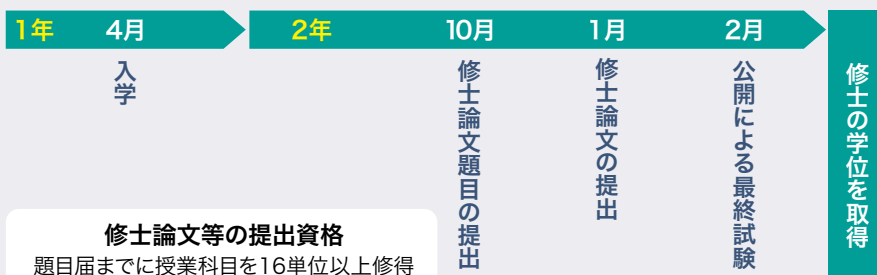
人間環境学専攻

M: 博士課程前期課程 D: 博士課程後期課程

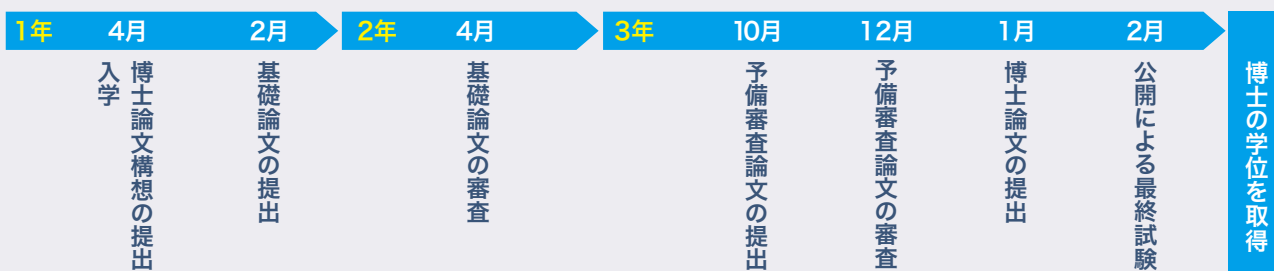


■ 学位取得のプロセス

博士課程前期課程



博士課程後期課程



研究科の特色ある研究

人間発達環境学研究科では、人間の発達及びそれを取りまく環境に関わる個別の研究に加え、個々の分野に蓄積された高い研究実績を土台に、産官学民協働型の実践的研究、分野横断型のプロジェクト研究を組織的に推進しています。以下は、現在、本研究科内で進める研究テーマです。いずれも、現代社会がかかえる具体的な諸問題を対象に、内外の研究者・機関と連携・協力しながら、戦略的な形で学際研究を行っています。

アクティブエイジング研究

岡田 修一 教授（所属：人間発達専攻、専門：加齢の身体運動科学）

わが国の少子高齢化は、医療・福祉領域のみならず、経済・産業・文化などでも、広範で複雑な課題を生み出しています。アクティブエイジング研究の目的として、世代を超えた人々の参画のもと、健康を維持しながら社会参画できる、安全な場としてのコミュニティを創出することが挙げられます。生活の場であるコミュニティの課題を明らかにし、それを解決するためには、研究者グループの分野横断的・学際的アプローチに加え、研究者が自治体、住民、企業などと協働し、研究を進めていくことが求められます。本研究プロジェクトでは、「健康」「社会参加」「安全・安心」「多世代交流」の観点から、地域コミュニティの様々な問題を明らかにします。さらに、本研究科の教員が地域住民、行政、企業と協働することにより、学びと活動の基礎となる「場」を形成し、その「場」を利用したプログラムの開発と地域への実装を行うことを目指します。



都市域における人と生態系の多様性

佐藤 真行 准教授（所属：人間環境学専攻、専門：環境経済学）

経済発展とともに、土地利用、資源利用、ライフスタイルなどが大きく変化します。それとともに、環境や生態系への影響が発生するだけでなく、それらに対する住民の選好も変化します。こうした状況においては、都市開発と生態系保全を総合的に考察する必要があり、生態系サービスの評価が重要となります。

本研究プロジェクトでは、都市経済と都市生態系の関係についての総合学術的理解と、生活の質の改善や持続可能な発展に向けての研究を行います。そのために研究チームを本研究科の経済学者、生態学者、心理学者をコアとして、関連する自然科学ならびに社会科学の研究者で構成しました。この研究は、日本学術振興会の挑戦的萌芽研究として現在も継続しています。また、分析対象をアジアの主要な都市に広げ、例えばカンボジア等においても農業大学、環境省、CDRI (Cambodia Development Resource Institute)、UNDP (United Nations Development Programme) などと連携しながら研究を進めます。



ESDの基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援

吉田 圭吾 教授（所属：人間発達専攻、専門：臨床心理学）

このプロジェクトは、ライフヒストリーを独自の心理教育的方法として構築し、人の発達支援につなぐことを目的としています。この方法を通して、臨床実践や心理社会支援において、当事者の視点に沿った支援の道筋を協働で探求することを可能とします。研究科の様々な教育研究分野（発達支援、成人教育、多文化間教育、特別支援教育、生涯発達心理、臨床心理など）をつなぐプロジェクトです。

ライフヒストリーとは人生史、個人の生の歴史です。高度な科学技術と情報化の進展によって、医療・看護や心理・教育の実践の場で、個人の生の軌跡が見失われる時代となりました。名をもった個人に焦点をあて、その人の体験を聴き、体験の意味を掘り起こすことの実践は今において強く求められています。フランスのライフヒストリー研究会と毎年国際交流を続けており、2016年2月に第7回の国際シンポジウムを神戸大学において開催しました。



環境ストレスと疾病リスクを客観的に評価するシステムの開発

江原 靖人 准教授 (所属：人間環境学専攻、専門：生物有機化学)

本プロジェクトは、人間の健康の維持、及び心理的、物理的疾患の予防を目指し、ストレス（心理的要因、物理的要因（電磁波、紫外線他）など）や、疾病のリスクを迅速かつ客観的に定量化し評価できるシステムを構築することを目的としています。公衆衛生学、環境バイオテクノロジー、ヒューマンエレクトロニクス、分析化学、高分子材料化学、マイクロ流体工学を専門とする本研究科の教員が協力し、研究を進めています。1つの例として、糖鎖修飾核酸を用いたインフルエンザウイルスの高感度検出システムの開発を進めています。インフルエンザウイルス表面に存在するヘマグルチニンタンパク質を認識する人工核酸を用いることで、抗体よりも安定でかつ、ヒト型、トリ型、またこれらが変異した新型コロナウイルスに対しても高感度検出が可能なシステムを作ることを目指しています。



生活安心指標の考案： 質の高い生活を実現する人間環境の総合的アプローチとその指標化

井上 真理 教授 (所属：人間環境学専攻、専門：衣環境学)

人間にとって安心して暮らしやすい生活とはいかなるものか、またそれを実現するためにはどのような条件がいかに満たされなければならないのか、さらにそこでの課題は何かという問題を、「人間発達」及びそれを支える「人間環境」の視点から総合的に検討したうえで、それを可視化する指標を考案することを目的としています。本研究は、自然・社会条件に制約されながらも、それに対して自律的に生きていこうとする主体としての人間へのまなざしを重視して、社会科学、人文科学、自然科学が重ねてきた研究蓄積をもとに、「安全安心な生活」について再検討します。さらに、その検討成果を「生活安心指標」として可視化することを目指しています。



高度教員養成プログラム開発研究

稲垣 成哲 教授 (所属：人間発達専攻、専門：教育科学)

グローバル化する知識基盤社会においては、地域の教育実践現場でのアクションリサーチに主導的に携わり、かつ、国際的にも通用する高度な教育能力および教育実践研究能力を備えた教員の養成が重要な課題となっています。そのため研究科では、教員を目指す大学院生が、神戸大学附属学校部と協働しつつ、アクションリサーチによる実証的研究に取り組んでいます。この研究をもとに、専修免許を取得し教職を目指す博士課程前期課程在学学生を対象に、高度教員養成プログラムを実施し「高度専門教員養成プログラム修了認定書」を附属学校部及び本研究科より授与しています。その特徴は、高い専門性に基づく教科内容研究と適切な指導法研究の結びつきを重視している点、及び、論理的な分析に加え、リアリティある現場と共同し柔軟に応答する実践性を重視している点にあります。これらを基盤として、授業をデザイン・評価する際の枠組みを構成し、一度構成したものを見直す力を備えた、省察的に教員として成長し続ける教員の養成を目指しています。



大学院生の研究活動

人間発達環境学研究科の学生は、人間の発達及びそれを取りまく環境に関わるそれぞれの研究課題に取り組みながら、多様な分野の研究者や学生と協働する学際・実践的研究にも深く関わります。学生はこれらの研究活動を通して、現代的諸問題を解決するための具体的方策を提案し、問題に柔軟に対応出来る行動力を身につけます。学生の様々な研究活動の例を紹介します。

ライフヒストリー・プロジェクトに参加して

私はライフヒストリー・プロジェクトの一環として、人間発達専攻が主催する先端的研究を進める研究会「研究道場」に参加してきました。一人の人生には人々との出会い、出来事と社会的な背景が内包されています。それらが結びつくことで、思いもよらない意味が生まれ、その生に影響を与えています。研究道場ではこれらの過程を丁寧に捉えていくことにより、一つの生の歴史には一見想像できないほどの奥行きがあることを学びました。私は修士論文の研究で、ある地域における太平洋戦争の戦跡が地元住民の方にどのように受け取られているのかについて聞き取り調査を行っていますが、そこにおいても研究道場で学んだ一つの人生の奥深さを強く実感しています。その人の人生に私自身が関わることでライフヒストリーの新たな結びつきが生まれていくのだと感じています。

(人間発達専攻 博士課程 前期課程 2年)

緑地の価値に関する研究に関わって

私の研究内容は簡単に言えば緑地の価値評価です。私は、人間環境学専攻生活環境論コースの環境経済学を主軸とするゼミに所属しているので、経済学的手法を用いて緑地の価値評価を行うわけですが、これが可能になったのは自然科学的な知見を提供してくれた共同研究をしている自然環境分野の研究室の力添えがあったからです。このように学際的な研究に携わることで、考え方の多様性を知ることができ、自分の研究分野の観念に縛られることなく視野を広げることができると思います。「人々により豊かな生活を送ってもらう」ことが研究のひとつの目標なので、今後もその目標を達成するために必要なことを、定説に縛られることなく、多角的に自分で検討していきたいと考えています。

(青島 一平：人間環境学専攻 博士課程 前期課程 1年)



ESD スタディツアープログラムの実践に関わって

私はESDスタディツアープログラムの実践に関わっています。ESDスタディツアープログラムとは、主に高校生、大学生が様々な分野領域の活動を巡ることを通して、徐々にESDを理解することを目的としたプログラムです。このプログラムの主催組織であるESD推進ネットひょうご神戸(RCE兵庫-神戸)には、神戸大学の教員だけでなく、地域活動の実践家や行政職員、企業家、学校の先生などの様々なステークホルダーが参加しています。私はESDスタディツアープログラムのコーディネーターを務めることで、様々な団体・人とのつながりと多様な学びの機会を得ることができました。今後は、このつながりを参加者へと紡いでいき、より多くの人々がESDに触れられる仕組みをつくっていききたいと考えています。

(堤 拓也：人間発達専攻 博士課程 前期課程 2年)



経済発展のための社会事業「SEED」に参加して

2015年度神戸大学ではじめて募集されたSocial Enterprise for Economic Development (SEED)「経済発展のための社会事業」というプログラムに参加しました。このプログラムはASEAN主導のものであり、ASEAN諸国を中心に学生や研究員が集い、コミュニティビジネスを視察しながら、新しい事業のあり方について議論をします。私が参加した際、開催国はフィリピンであり、山岳地域の経済活性化のために、コミュニティやマーケットの調査、論文等から情報を集め、毎日様々な国から集まった学生や教授との議論に明け暮れました。もちろん共通言語は英語です。私は決して流暢に英語を話すことはできませんが、言葉ができないということに負い目を感じるくらいなら、自分の中で考えを巡らせ、とにかく口を開くことが大切ではないかと考えます。たとえ言葉ができたとしても、中身がなければ意味がない。言葉を学ぶことはもちろん大切ですが、他国の学生や教授と真剣に議論をしたいのであれば、それだけに特化していても対等には扱ってもらえないことを痛感しました。私は手段としての英語を学ぶことに対するモチベーションをあげてくれたこの好機にとっても感謝しています。

(木嶋 恭子：人間環境学専攻 博士課程 前期課程 2年)



社会貢献・地域貢献

大学と社会をつなぐプラットフォーム「発達支援インスティテュート」

人間発達環境学研究科は、「人間発達に関する教育研究、実践的研究を行うとともに、地域との連携を進め、多層・多面的なコミュニティの創成及び社会貢献に資すること」を目的に、附属研究施設である発達支援インスティテュートを設置しています。本インスティテュートは、本研究科が対象とする現代の問題に即してこの目的を実現するため、以下の5つのユニットを置いています。

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターでは、本研究科で蓄積されてきた研究成果と、地域社会の実践活動とを融合させながら、現場に即した実践的研究活動を行っています。人間の発達とそれを支える活動を行っている地域組織、NPO、NGO、企業、行政、学校等の人々と連携しながら、研究・実践を深め、人間らしさにあふれたコミュニティの創成を目指しています。



心理教育相談室

心理教育相談室は、地域住民を対象とする心理相談機関と臨床心理士養成に関わる実習機関をかねて、これまで活発な相談援助活動を実施してきました。臨床心理学コース（前期課程）の大学院生が臨床心理士の資格を持つ本研究科教員による指導のもと、継続的な心理相談活動に従事しています。子どもからお年寄りまでさまざまな年代や立場の人が相談に訪れており、主に成人を対象とした面接相談である臨床心理面接や子どもを対象とするプレイセラピーを中心に、年間約1000件の相談面接を実施しています。



サイエンスショップ

サイエンスショップは、市民と専門家（科学者、技術者など）の対話と協働の場づくり、市民のさまざまな科学活動への支援、地域の学校や社会における科学教育に対する支援などに取り組んでいます。地域社会の市民が科学技術をより身近に感じ、課題解決にそれを利用し、また「研究」も含めて「科学」という営みを楽しむ文化をひろげてゆくことを目指し、実践的な活動を行っています。



教育連携推進室

近年、大学に対して、初等中等教育との連携に係る社会貢献を期待する声が高まっています。教育連携推進室は、そうした要望を踏まえ、本学部・研究科に長年にわたり蓄積された学問的成果を土台にして、2015年12月、「高等学校をはじめ小学校、中学校、特別支援学校、教育委員会等と協力し、高大連携事業を推進するとともに初等中等教育に対する支援及び学校教育・社会教育における連携事業への協力を行うこと」を目的に新設されました。



アクティブエイジング研究センター

人口の高齢化は、今日多くの国で解決すべき重要な社会的課題の一つとなっています。世界保健機関（WHO）が掲げる「アクティブエイジング（活力ある高齢化）」はこの課題解決に向けた指針として注目されています。アクティブエイジング研究センターは、本研究科に蓄積されたこの分野の研究成果を踏まえ、2015年12月、「アクティブエイジングに関わる先端的研究を創発し、本研究分野の活性化とその成果の社会的還元を通して高齢化に係る課題解決に資すること」を目的に新設されました。



社会貢献・地域貢献

産官学民協働によるアクションリサーチ

人間発達環境学研究科が推進する産官学民協働型の実践的研究は、個々の領域で困難とされる課題に対し、アクションリサーチの手法を用いた解決支援プログラムを開発・提供するものです。関係する人々と協働しながら研究を通して社会貢献の取り組みを積極的に推進しています。

ESDプロジェクト

持続可能な開発のための教育(ESD = Education for Sustainable Development) の観点で、以下の3つのプロジェクトを実施しています。

ESD ネットワーク支援プロジェクト

ESDに関心をもつ、地域社会のさまざまな団体・組織のネットワーク化を、当事者とともに促進するプロジェクトです。新しい理念にふさわしい新しい教育方法をさぐりながら、ESD グローカルスタディツアープログラム(略称: ESD スタディツアープログラム)の企画・実施を通して当事者が協働するのを支えたり、海外のESD推進ネットワークとの関係づくりを支援したりしています。

大船渡支援 ESD プロジェクト

東日本大震災の被災地の復興・まちづくりを人間育成・コミュニティ創成の観点から支援しています。ボランティアコーディネート、ワークキャンププログラム、スタディツアーの企画運営など、地域教育や社会教育の活動の中で蓄積されてきた手法を使って、被災地の「長く続く新しいまちづくり」に関わっています。

持続可能な島づくりプロジェクト

本研究科と教育連携協定を結んでいるハンセン病療養所 久光園(岡山県瀬戸内市)の協力のもと、新しい「人権学習」及び、それを基盤としたESDプログラムを実施しています。ハンセン病患者の人権・幸福追求に寄り添うとともに、「いのちの持続性」を大切にすると人間形成の方法論を探究しています。



障害共生支援プロジェクト

学内外の研究員、対人支援やアート活動などを学ぶ学生のみなさんが協働して、障害のある人々を排除しないインクルーシブな社会づくりに関わる実践・研究・教育を行っています。「のびやかスペース あーち^(注1)」やカフェ「アゴラ^(注2)」などの学内施設をフィールドとし、また韓国との共同研究によって、制度の構築から人々の日々の葛藤解決まで、幅広い課題に取り組んでいます。これまでに取り組んできた実践、共同研究、学生が参加した研究の成果について、多くの出版物を通して公開しています。

(注1) のびやかスペース あーち <http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/518>

(注2) アゴラ <http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/525>



心理教育相談室の取り組み

心理教育相談室担当の本研究科教員は、心理教育相談室での相談援助活動の他に、さまざまな領域において多様な地域貢献・社会貢献活動をおこなっています。主なものとしては、地域の小・中・高等学校、特別支援学校、社会福祉法人の主催する講演会や研修会に指導的な立場で参画しています。また、地域住民が抱える心理的問題に対する実践的な相談活動や巡回支援にも取り組んでいます。さらに、東日本大震災の災害復興支援に関連して現地の学校や大学に赴き、スクールカウンセリング支援や学生相談支援に関わる活動、講演等を実施しています。



サイエンスカフェの開催と支援

サイエンスショップは、神戸市において「サイエンスカフェ神戸」を開催するほか、伊丹市、姫路市、南あわじ市など、兵庫県内を中心に、各地で市民グループ等によるサイエンスカフェの企画・開催を支援しています。サイエンスカフェは、街のカフェなどに科学者等の専門家をゲストに招き、科学・技術などに関する話題について語るイベントで、市民と科学者等の対話の場づくりを目的としています。



市民の環境保全活動等への支援

サイエンスショップは、市民による地域の環境保全活動への支援にも取り組んでいます。これまでに、南あわじ市神代地区のシカによる食害対策への支援や、兵庫県西部の佐用川流域のオオサンショウウオに象徴される生態系保全活動への支援などに取組んできました。本研究科の研究者が開発した「環境DNA」の手法により、市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の河川調査に協力しています。



マスターズスポーツを通じた生涯スポーツ振興

成人・中高年者を対象としたスポーツ振興活動として、元高校球児の大会「マスターズ甲子園」の運営と共に、その参加者の母体である「全国高校野球OBクラブ連合」を発足させ、現在37都道府県520校が加盟する組織運営事務局をマスターズスポーツ振興支援室に設置し、学生と教員が主体となって振興活動を継続しています。同支援室では2021年に開催される関西ワールドマスターズゲームズの世界大会の招致にも関与し、開催に向けてマスターズスポーツ推進を通じた社会貢献活動と共に教育と研究のフィールドを開発しています。



鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで、安全に暮らせるまちづくりを行うため、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げ、アカデミックサロンの企画・実施に取り組んでいます。鶴甲地区（神戸大学発達科学部キャンパス周辺地区）の住民の学びと活動の場を基礎とし、神戸大学をコミュニティの中心に位置付けます。アカデミックサロンでの各種プログラムを通して、住民同士のネットワークを形成するとともに、ファシリテーターを養成し、住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援しています。



「初等教育要領」の開発

本研究科には、神戸大学の附属学校と連携し、共同研究に取り組んでいる教員が少なくありません。近年では、文部科学省の指定を受けて（2013年度～2016年度）、本学の附属小学校と附属幼稚園が取り組んでいる「初等教育要領」の開発への研究協力が挙げられます。幼児教育と小学校教育の9年間を一体としてとらえた「初等教育要領」を作成することで、幼稚園と小学校との円滑な接続、発達段階を踏まえた教育内容の提供が期待されています。2015年1月には、『『幼少接続』から『幼少一体』へ』というテーマで研究協議会が開催されました。人間発達専攻学び系講座の教員が中心となりながら、附属学校との連携を通して、研究成果を広く社会に還元するように努めています。



国際学術交流

人間発達環境学研究科は、世界各国の教育・研究機関と積極的に交流を行っています。海外から多くの研究者が本研究科を訪問し、学生も主体的に学術交流に関わり、研究集会を開催しています。また、学生は、神戸大学や本研究科が協定を結んだ海外の教育・研究機関等に派遣され、現地の学生とともに、調査研究、研修等を積極的に行っています。

海外協定校との学術交流

神戸大学は、海外の大学等の教育研究機関との間で学術交流協定を締結しています。同時に学部・研究科という単位でも海外の大学の学部・研究科との間で独自に学術交流協定を締結し、学術及び教育上の様々な分野において、研究者や学生の交流をはじめとして教育・研究に関する交流活動を行っています。これらの中には、授業料の相互不徴収や単位互換制度を含めた学生交流細則を締結し、神戸大学への授業料の納付のみで休学することなく留学できる交換留学制度を実施している協定校もあります。

交換留学のための学生交流細則を大学全体として結んでいる「全学協定校」は約20大学、学部・研究科という単位で結んでいる「部局間協定校」は約10大学ありますが、近年のグローバル人材育成の要請に応えるべく、新たな協定の締結を進めています。



海外研究交流・実態調査「スタディツアー」

本研究科では、講義や演習の一環として、いくつかの具体的なテーマを掲げ、海外の学生、研究者、実践家等と問題意識を共有しながら調査研究や学術交流を進めるスタディツアーを積極的に行っています。日頃キャンパスで蓄積した知見や知識を以て海外で実態調査を行うなど、より進んだ取り組み事例からさらなる洞察を得る機会となっています。海外の同年代の学生との議論や交流は、困難を伴いつつもその後の研究の大いなるインセンティブとなります。これまで知的障害者高等教育をテーマとしたナザレ大学（韓国）との交流、健康・生活の質に関するグラーツ大学（オーストリア）との共同研究、サンペダ大学（フィリピン）との貧困政策実態調査などに取り組んできました。



学術Weeks（国際学術交流週間）

学術Weeksは、2008年より本研究科の国際交流推進の一環として設置され、毎年、10月～11月に海外から多くの研究者を招聘し、研究集会等の学術交流を行っています。教員のみならず、大学院生や学部生も積極的に参加し、領域横断的な学術交流の場となっています。学術Weeksの主な目的は、多くの大学院生が、様々な分野の国際交流を通して、自分の研究を見つめ直し、研究会の企画、運営、発表などの多くのスキルを習得することです。学際的・横断的研究を積極的に進める本研究科において、大学院生が多様な研究領域に接する有意義な機会となっています。



主な海外協定校

国名 / 地域	教育研究機関
中国 China	Beijing Normal University [※]
	East China Normal University [※]
	Shanghai Jiao Tong University
	The University of Hong Kong [※]
	Tsinghua University
	Wuhan University
	Zhejiang University [※]
フィリピン Philippines	San Beda College [※]
韓国 Korea	Gongju National University of Education [※]
	Korea Nazarene University [※]
	Pusan National University [※]
	Seoul National University
台湾 Taiwan	National Taiwan University
オーストラリア Australia	The University of Queensland
	The University of Western Australia
カナダ Canada	University of Ottawa
アメリカ合衆国 USA	University of Pittsburgh
オーストリア Austria	FH Joannrum University [※]
	Johannes Keplaeer University [※]
	University of Graz

国名 / 地域	教育研究機関
ブルガリア Bulgaria	Sofia University St. Kliment Ohridski
チェコ Czech	Charles University
フランス France	Ecole Normale Supérieure de Lyon [※]
	Université de Paris Ouest Nanterre La Défense
	Université Lille 3 [※]
	Université Panthéon-Assas (Paris II)
	Université Paris Diderot-Paris 7
ドイツ Germany	Universität Hamburg [※]
イタリア Italy	Ca' Foscari University of Venice
オランダ Netherlands	Leiden University
ポーランド Poland	Jagiellonian University
リトアニア Lithuania	Vilnius Gediminas Technical University [※]
ロシア Russia	Moscow State Pedagogical University [※]
英国 United Kingdom	University of London

※人間発達環境学研究科が締結する協定校

国際シンポジウム

■ アジアの包括的で持続可能な発展についてのワークショップ ～経済、社会、人間発達と環境～

アジアの持続可能な発展について、資源や生物多様性などの環境問題から、教育・貧困・制度などの社会問題まで包括的な観点から考えるワークショップを開催しました。カンボジア、タイ、シンガポール、日本など、アジアの発展途上国および経済的先進国の双方から研究者や政策担当者を招き、アジアの持続可能な発展についての理解を深め、今後の対策について、包括的な学際的・政策的な視点から活発な議論を行いました。



■ 国際ESDセミナー

人間発達環境学研究科と学術協定を結ぶIUBAT 大学 (International University of Business Agriculture and Technology : バングラデシュ) の創設者である M Alimullah Miyan 氏を招き、ESD セミナーを開催しました。「バングラデシュの ESD と知識基盤型地域開発～コミュニティの自助機能の向上をめざして～」と題する基調講演の後、学生を交えて、活発に討議が行われました。



■ アクティブエイジング研究センター設立記念シンポジウム

アクティブエイジング研究センターの設立を記念し、高齢化社会における課題やその解決などを議論するシンポジウムを行いました。WHO 神戸センター長による基調講演、国内外の研究者を招いての特別講演の後にパネルディスカッションが行われ、多くの参加者の間で活発な議論がなされました。また、ポスターセッションや企業からの展示を通じ、アクティブエイジング研究に関わる多分野間の交流を実施しました。



人間発達専攻

Department of Human Development

専攻長のメッセージ

人間発達専攻は、多様な側面を持つ人間の発達を、総合的な視点から教育研究の対象とします。前期課程においては、人間の発達に関する実践的諸課題の解決やそれを支える新たな公共の創出に貢献する、高度専門職業人の養成を目的とします。後期課程においては、人間の発達に関する高度な専門的学識及び創造的な研究能力を持つ自立した研究者、又は研究能力に加えて、確かな教育開発力を備えた大学教員の養成を目的とします。さらに、特別な履修コース「臨床心理学コース」と「発達支援1年履修コース」を設置し、実践的職業人も養成します。本専攻では、幅広い問題関心のもとに、こころ系、表現系、からだ系、学び系という各系の方法及び視点の多様性を学習し、自らの専門の新たな位置付けや特徴を習得します。そのため、多面的かつ総合的に問題にアプローチする仕掛けが随所に組み込まれています。たとえば、前期課程の共通必修科目「人間発達総合研究Ⅰ」では、最先端の研究を推進する教員から、従来の枠組みでは捉えることのできない問題とそれを解きほぐすための方法論が示されます。

人間発達専攻長 稲垣 哲成 教授



■ 教育の特色

本専攻では、学生自らによる主体的な創造的取り組みを尊重し支援する教育プログラムを採用します。

「学問領域複合型人間発達研究」の有効性

人間の発達とは、すべての人がもつかけがえのない個性を前提とする概念です。一人ひとりの人間は、様々な潜在能力をその人に固有の道筋で開花させていくのであり、それを人間の発達と呼ぶことができます。ですから、実際に現れる発達の様相は、とても多様で複雑です。本専攻は、一筋縄では捉えられない人間の発達と向き合おうとするとき、関連する学問分野が相互につながり、それぞれに蓄積された学問的知見を有機的に結び付ける「学問領域複合型人間発達研究」こそ、発達の実像の解明に効果的であると考えています。

研究課題に応じた学生自身によるコースワークの設定

本専攻は、学生自身が、既成の概念にとらわれることなく、それぞれの問題意識に基づき独自の視点から人間の発達を解明することを期待しています。そのため、心理学、健康科学、体育学、芸術学、教育学等、多岐にわたる専門科目を置き、学生が研究課題に応じてそれらを組合せ、自分自身のコースワークを設定できるようにしています。

専攻共通科目の設置ときめ細かな指導体制

本専攻には、自由なコースワークを支え、専門性を確保する仕組みが用意されています。「人間発達総合研究Ⅰ、Ⅱ」や「人間発達研究」などの専攻共通科目が置かれ、人間発達研究の視点や研究方法の多様性を学習するとともに、それぞれがとるべき研究上の位置や方向を理解できるようにしています。また、主指導教員1名、副指導教員2名の3名体制により、丁寧な指導が行われます。特に副指導教員は、その学生の研究内容に関連して他の学問領域から助言することが期待され、専門の枠にとらわれない独創性・創造性をもった研究を可能にします。

コミュニティ創成に役立つ人材の養成

本専攻では、包摂する学問領域の広さから、修了生は多彩な進路で活躍することが期待されます。いずれの進路をとるにせよ、人間発達にかかる豊かな知見とともに、多世代の人々がともに参画できる安全で安心なコミュニティの創成に役立つ人材になることが期待されます。前期課程では、人間発達という視点から21世紀の諸課題に果敢に取り組み新たな公共性の創出に貢献できる高度専門職業人を養成します。また、後期課程では、自らの専門以外の学問領域に広く目配りしながら、コミュニティ創成の研究を主体的に展開できる研究者や大学教員を養成します。

先端的研究に協働する「研究道場」の設置

本専攻では、人間発達研究の特定分野において、特に優れた大学教員・研究者を養成するため、本研究科の教員が共同で先端的研究を進める研究会に学生が参加し協働する体制「研究道場」を整備しています。そこで、学生が実践的な研究力量を身につけ、研究者として早期に自立できる素養を習得するようにします。

■ 系講座

こころ系講座

こころ系講座では、心理学と健康科学を総合した観点から、心身の発達や健康、その促進・阻害要因の探究と複雑な相互関係の把握に努め、広い視野と深い専門性をもって人間発達の様相を追究します。

研究領域

- 心理発達基礎（発達障害心理学、発達心理学、教育心理学、人格心理学、発達障害臨床学、臨床心理学、カウンセリング、発達臨床心理学）
- 健康発達（健康科学、健康教育、ヘルスプロモーション、健康心理学、環境保健学、公衆衛生学）

表現系講座

表現系講座では、人間の感性の発現としての表現活動を教育研究対象とし、実践表現を基盤とした理論構築や、その営みによって生み出された様々な「もの」「こと」に関わる多面的な研究を行います。

研究領域

- 表現創造（作曲・編曲、声楽、器楽、舞踊学、美術・彫刻、音楽療法、絵画表現）
- 表現文化（西洋音楽史、民族音楽、近代建築史、感性科学、ファッション文化論、社会情報学、認知科学）

からだ系講座

からだ系講座では、日常生活からレジャーやスポーツにわたる幅広い身体活動や人間行動の発達と加齢及び適応現象を教育研究対象とし、人々の発達や社会活動に関わる様々な課題について学際的な観点から研究を行います。

研究領域

- 身体行動（体育・スポーツ史、運動生理学、運動心理学、スポーツ技術論、スポーツ社会学、バイオメカニクス、身体運動システム学）
- 行動発達（応用生理学、ジェロントロジー、高齢者心理学、スポーツプロモーション、加齢の身体運動科学、社会老年学）

学び系講座

学び系講座では、教育及び学習等に係わる社会的・個人的営為を対象に教育研究を行い、人間の誕生から高齢期に至るこころ及び諸能力の発達や人間形成に関わる諸要因について理論的、実証的に探究します。

研究領域

- 教育科学（科学教育、美術教育、社会認識教育、教育方法学、教育制度、教育行政、日本教育史、西洋教育史、教育哲学）
- 子ども発達（発達心理学、幼年音楽、児童文学、数理認識、図工・美術教育、乳幼児教育、身体発達発達）
- 発達支援（子ども家庭福祉論、生涯学習、障害共生支援、ボランティア学習、ジェンダー論）

■ 履修コース（前期課程のみ）

本専攻では、実践的職業人の養成を目的とする2つの特別な履修コースを設置しています。

臨床心理学コース

臨床心理士資格認定試験の受験資格を取得できるコースで、心理臨床の専門職に求められる実践力と研究能力をともに高めます。

発達支援1年履修コース

職業人として高い成果を積み重ねてきた社会人を対象とし、発達支援に関する研究分野において1年間で修士号の取得が可能なコースです。本コースでは、実践に即した研究能力を高め、さらに高度に専門的な職業人としての能力を獲得することを目指します。

■ 取得可能な資格免許

幼稚園教諭専修免許状、小学校教諭専修免許状、中学校教諭専修免許状（保健体育、音楽、美術）、高等学校教諭専修免許状（保健体育、音楽、美術）、特別支援学校専修免許状、臨床心理士試験受験資格（臨床心理学コースのみ）



■ 心理発達基礎

前期課程では、心理学の専門的知識や技術を持って、心の発達と様相をトータルに研究するための能力と円滑な人間関係をマネジメントできる実践力を養成します。後期課程では、前期課程（臨床心理学コースを含む）での学習・研究を踏まえ、生涯にわたる心の発達について、さらに高度な専門的知識を深めると同時に、解明を求められている研究課題について、多面的・総合的な視点から研究し、成果をあげることのできる人材を養成します。

研究分野

相澤 直樹 准教授（臨床心理学、臨床心理検査（投影法））

青年期における自己愛的傾向と対人恐怖の傾向に関する調査研究を行っています。ロールシャッハ検査法を中心とする心理検査法（投影法）について実践的に研究しています。

赤木 和重 准教授（発達障害心理学）

自閉症児における自己と社会性に注目して研究しています。特に教示行為の発達と障害について、実証的な研究を行っています。

伊藤 俊樹 准教授（臨床心理学）

芸術療法や心理療法におけるクライアントのイメージの変化、及び、ロールシャッハテストを用いた芸術家の創造性について研究を行っています。

河崎 佳子 教授（臨床心理学、発達臨床心理学）

聴覚障害児の心理発達と家族支援について研究してきました。近年は、被虐待児童への心理的ケアについて乳児院・児童養護施設を舞台に取り組んでいます。

齊藤 誠一 准教授（発達心理学）

思春期の身体発達・性的成熟が当の青年及び親・友人など周囲の人間に与える心理的影響に関して研究しています。

坂本 美紀 教授（教育心理学）

児童の協調的な学びのプロセスとその支援に関心があり、科学的思考や科学的リテラシーを育成する授業の開発とその評価に取り組んでいます。

谷 冬彦 准教授（人格心理学）

青年期におけるアイデンティティ（自我同一性）の研究を中心として、広くパーソナリティ（人格）や自己に関する実証的研究をしています。

鳥居 深雪 教授（発達障害臨床学）

発達障害のある子どもたちの認知特性を理解し、効果的な介入方法を探ることが研究テーマです。心理、教育、医学、福祉等の学際的な研究を行っています。

林 創 准教授（認知発達心理学、教育心理学）

主として幼児期から児童期を対象とした認知の発達の問題に焦点をあてています。とくに「他者とかわる心」に関心があり、社会性の認知発達に関して、実証的に研究を行っています。

吉田 圭吾 教授（臨床心理学）

幼小中高大を中心とした教育現場における教育相談の理論と実際、保護者面接の在り方、発達障害や精神障害を抱える人へのアプローチ方法について研究しています。

臨床心理学コース

臨床心理士資格認定試験の受験資格を取得できる前期課程のコースで、心理臨床の専門職に求められる実践力と研究能力をともに高めます。

スタッフ

相澤 直樹 准教授（臨床心理学、臨床心理検査（投影法））

伊藤 俊樹 准教授（臨床心理学）

河崎 佳子 教授（臨床心理学、発達臨床心理学）

吉田 圭吾 教授（臨床心理学）

健康発達

心身の健康を支える体や心の仕組み、及びその発達、様々な環境要因が人の健康、発達、健康に及ぼす影響とそのプロセスについて教育研究を行い、それらの知見に基づいて、健康教育プログラムを開発し、その有効性を検証し、広く普及する活動を行います。

研究分野

加藤 佳子 教授 (健康教育、健康心理学)

心や体の健康に関する人の行動を探り、健康行動の獲得に関連する要因について解明し、HR-QOL (Health-Related Quality of Life) と well-being の向上を目指しています。

川畑 徹朗[※] 教授 (健康教育、ヘルスプロモーション)

思春期の様々な危険行動と関連が深いセルフエスティームなどのライフスキルやメディアリテラシーの形成に焦点を当てたプログラムの開発と評価研究を行っています。

中村 晴信 教授 (公衆衛生学)

生活習慣と疾病予防や健康増進との関係について、疫学調査と実験を組み合わせて、健康問題に関するメカニズムの解明について研究しています。

古谷 真樹 講師 (睡眠心理学、生理心理学、健康心理学)

心身健康の維持・増進を図るために、睡眠とストレスとの関連について生理学的手法を用いた基礎的研究と教育現場や地域における実践的研究を行っています。

村山 留美子 講師 (環境保健学、環境リスク学)

環境からもたらされるリスクと人の健康との間にある複合的な問題について、各種の実験や社会調査手法を用いてその解明に取り組んでいます。

※2017年3月で退職予定

■ 表現創造

芸術と生活と人生を新たな視点で統合することを目指し、地域社会において芸術に関わる生涯教育のファシリテーターや指導者の育成、あるいはそれと関係した音楽療法などの実践研究、及びコミュニティアートとしての新しい芸術形態の創造開発を目的とした教育研究を行います。

研究分野

岡崎 香奈 准教授 (音楽療法、即興演奏)

これまで認知症、失語症、障害児・者、不登校児等の臨床に携わってきました。現在は、疾病の有無に関わらず「表現者としての人間」の音楽行為とその臨床的作用を研究しています。

岸本 吉弘 准教授 (絵画表現)

近代以降の絵画表現を造形的な視点より分析し、それらを継承する形で現代性を俯瞰、それらに対称化される「日本」という存在を見つめています。

佐々木 倫子 教授 (声楽)

歌曲における朗唱法に関する研究、特に日本歌曲、ロシア歌曲、ドイツリートにおいて「語る」と「うたう」の差異を明確にしつつ表現法を研究しています。

関 典子 准教授 (舞踊学、コンテンポラリーダンスの創作と研究)

舞踊は有限の身体や動きという儚いものを媒体とする芸術です。その「現在性」にこだわり、表現・研究活動をフィードバックしながら探究しています。

田村 文生 准教授 (作曲、編曲、西洋芸術音楽を中心とした作品研究)

20世紀の西洋音楽を中心とした音楽語法の分析や、様々な演奏形態における音楽の新しい表現手法の開拓と創造に取り組んでいます。

塚脇 淳 教授 (美術、彫刻)

私たちは西洋から何を学び何を受け入れ何を自分たちのものとしてきたのか、20世紀美術を代表する作家や表現を様々な角度から考察・検証し、「彫刻」を思考しています。

坂東 肇 教授 (器楽 (ピアノ、室内楽))

演奏は生命の響きそのものであり、人間のすべてを映し出すものです。人間の個性や人格の発達と、その演奏との相関に興味があり、研究しています。

■ 表現文化

表現を、人間が意識するかどうかに関わらず生み出してきた文化として捉え、歴史的・社会的に探求します。文献調査や、実験、フィールドワークに実際の表現活動といった様々な研究へのアプローチの中で、表現文化の過去・現在・未来に対する深い認識と柔軟で創造的な構想力を養い、さらに、その認識や構想を他者に向かって分かりやすく説得的に伝えることのできる論理的な表現力を涵養します。

研究分野

梅宮 弘光 教授 (近代建築史)

近代建築の歴史・都市環境形成史が専門です。前者では建築におけるモダニズム思想の生成と変容、後者ではとくに戦後神戸の都市環境形成史を研究の柱としています。

大田 美佐子 准教授 (西洋音楽史、音楽美学)

両大戦間の音楽劇を中心に、文学や美術などの諸芸術、社会やメディアとの関わりなど、様々な背景から「音楽表現や音楽文化の歴史」を研究しています。

小高 直樹 教授 (感性科学、図形科学)

芸術などの創造的表現における、あいまいで、主観的、多義的、状況依存的な感性情報を抽出し、工学的に取り扱うことができる論理情報に置換する方法を模索しています。

谷 正人 准教授 (音楽民族学)

イラン音楽を題材に、「即興」「伝統」「オリジナリティ」などの諸概念を研究しています。最近ではイラン国外に亡命した音楽家達も対象に、イラン音楽の教授法の変遷やヴァリエーションを、近代教育の知識観・教育観といわゆる徒弟制のそれとのダイナミクスとして比較する研究をしています。

田畑 暁生 教授 (社会情報学、映像論)

情報社会に関する理論的・実践的な諸問題を扱います。具体的には、情報社会論の思想的系譜や、映像の内容分析、地域情報化政策の影響などを扱います。

野中 哲士 准教授 (認知科学、生態心理学)

わざが見せる独特の秩序や、人が作るモノの配置やレイアウト等、人の活動が周囲の環境と出会う界面に生まれる独特の秩序の形成プロセスについて検討しています。

平芳 裕子 准教授 (ファッション文化論、表象文化論)

西洋近現代における「ファッションと女性」との関わりを、雑誌や絵画などのメディアを中心とするイメージ・言説の分析を通して考察しています。

■ 身体行動

身体運動のメカニズムや心理的・生理的効果について、運動心理学、身体コンディショニング、スポーツバイオメカニクス、ストレス生理学、身体運動制御論、運動処方論の各面から、また、運動・スポーツの文化・歴史及び振興施策について、スポーツ文化史、生涯スポーツ論の各面から学び、身体行動に関する高度な知識と研究手法を修得します。

研究分野

秋元 忍 准教授 (体育・スポーツ史)

19世紀末から20世紀初頭の英国を主たる研究対象として、近代社会におけるスポーツ文化の特質を、歴史学の方法により解明します。

河辺 章子 教授 (運動生理学 (身体運動制御))

随意運動の制御機構を探索し、ヒトの動作の巧みさを探るとともに、巧みな動作の獲得過程を解明し、スキル向上への貢献を目指しています。

木村 哲也 准教授 (身体システム学、応用生理学、バイオメカニクス)

立位平衡制御システム等、ヒト運動制御システム内の感覚入力・運動出力の統合メカニズム解明等の基礎的研究から、運動補助器具開発等の応用研究まで幅広く取り組んでいます。

佐藤 幸治 准教授 (スポーツ生理・生化学)

運動やサプリメントによる糖尿病、メタボリックシンドロームの新規予防・治療法の開発及び1型糖尿病患者に対するエクササイズガイドラインの作成を行っています。

高田 義弘 准教授 (運動生理学 (身体コンディショニング))

競技力向上・障害予防のためのトレーニングと運動による身体コンディショニングやパフォーマンスへの影響について研究しています。

高見 和至 教授 (運動心理学)

現在の研究テーマは、「運動習慣の心理的プロセス」です。人間行動の発現から定着、習慣化を生み出す心理的プロセスを運動行動から解明しています。

前田 正登 教授 (スポーツ技術論、スポーツバイオメカニクス、スポーツ工学)

運動・スポーツにおける合理的な動作・技術の探究とその習得過程に関する研究、及び選手の技術レベルに応じた用具の設計開発のためのスポーツ工学的研究を行います。

山口 泰雄 教授 (スポーツ社会学、生涯スポーツ論)

スポーツの社会科学の理論と手法により、スポーツ参与、スポーツ政策、スポーツ・ツーリズム、国際比較研究などに取り組んでいます。

■ 行動発達

社会科学及び自然科学の両面から現実のさまざまな人間行動を多角的に捉えるために、老年学(ジェロントロジー)、運動老年学、社会学、応用生理学、身体運動科学、行動適応学などの多分野の研究領域を設け、人間行動の加齢に伴う発達や環境への適応に関わる課題を学際的観点からアプローチできる人材を養成します。

研究分野

岡田 修一 教授 (加齢の身体運動科学)

高齢者の立位バランス能力の多角的な分析・評価、及びその知見に基づいた転倒予防法の開発と効果判定に関する研究を行っています。

片桐 恵子 准教授 (社会心理学、社会老年学)

高齢者の社会参加活動、社会や他者との関わり、健康や健康行動などについて、社会心理学的な関心から高齢社会に関して広く国際的学際的な研究を行っています。

近藤 徳彦 教授 (応用生理学、運動生理学、環境生理学)

運動、年齢、性差、日内変動、運動トレーニング、人種差などからヒトの体温調節機能のしくみを統合的な観点から研究し、この機能の魅力にせまります。

長ヶ原 誠 教授 (スポーツプロモーション、健康行動科学、ジェロントロジー)

成人・中高齢者を対象とした健康増進やスポーツプロモーションに関する理論・実証的研究と共に、アクションリサーチを通じた事業評価研究を行っています。

原田 和弘 特命助教 (老年行動学)

身体活動・運動を通じた健康づくりの実現に貢献することを目指し、高齢者の身体活動・運動習慣の形成について、学際的な観点から研究しています。

増本 康平 准教授 (高齢者心理学、実験心理学、認知心理学)

豊かな高齢社会を実現するための環境・技術の構築を目指し、加齢による認知機能・行動要因の変化について実験心理学的手法を用いた研究を実施しています。

■ 教育科学

今日の社会が直面するさまざまな教育課題への対応を念頭におき、高度な専門知識や技術をあわせもつ教育現場のリーダーとして貢献できる人材(研究者、教員、教育行政職等)を養成します。

研究分野

稲垣 成哲 教授(科学教育)

科学教育におけるテクノロジーを利用した学習支援のための理論、方法、評価及び実践デザインについて研究しています。

奥山 和子 講師(日本語教育、日本事情、異文化間教育)

留学生のアカデミック・ジャパニーズ向上に向けて取り組んでいます。中でも特にアカデミック・ライティングの効果的指導法の研究をしています。

川地 亜弥子 准教授(教育方法学)

子どもの発達を助成する意図的な営みとして教育をとらえ、その効果的なあり方を探究しています。特に子どもの生活と言語表現の指導に注目しています。

勅使河原 君江 講師(美術教育)

美術を通した子どもの発達支援研究をしています。研究テーマは、前衛美術作家集団、具体美術協会が行った子どもの美術教育と対話を基本とした美術鑑賞と制作活動です。

船寄 俊雄 教授(日本教育史、教育学)

明治時代以降現在に至る教員の養成史を研究しています。その中でも最も関心をもっているのは、戦前にあった中等教員の国家検定試験(文検)の研究です。

山口 悦司 准教授(科学教育)

科学教育研究(Science Education Research)という専門分野です。人々の科学の学習をより有効に支援するための学習環境デザインについて理論的・実践的に研究しています。

山下 晃一 准教授(教育制度論)

学校の存立に関する組織・制度論的探究(地域と学校の批判的創造的關係の再構築、校内運営組織の刷新、学校と福祉・司法等機関との連携等)について研究しています。

吉永 潤 教授(社会認識教育論)

社会認識とは何か。それは、つきつめれば、人間がどうすれば共存しうるかという問いへの各自の答えの構築だと考えています。あなたならどう答えますか？

渡部 昭男 教授(教育行政学(地域教育学、特別ニーズ教育))

特別ニーズ児を含む人間発達と地域創造を保障できるような教育行政の在り方、特に住民と身近な基礎自治体(市町村)の可能性を探っています。

渡邊 隆信 教授(西洋教育史、教育哲学)

ドイツのオーデンヴァルト校を中心とした「新教育」の思想と実践の研究と、精神科学的教育学派を中心とした教育学説史研究に取り組んできました。近年は日本とドイツの教師教育改革にも研究関心を広げています。

■ 子ども発達

乳幼児から青年期の子どもを対象に、心やからだの発達と教育、言語・音楽・造形表現の発達と教育、数理認識発達と教育に関する専門領域を学び、子どもの教育と発達を総合的に研究します。

研究分野

岡部 恭幸 教授(数理認識論、数学教育)

算数・数学の教材や授業を通して獲得される数理認識の構造や概念形成についての研究とそれに基づく教育内容や方法の開発に取り組んでいます。

北野 幸子 准教授(乳幼児教育学、保育学)

乳幼児(0～8歳くらい)を対象とした、教育内容や方法、保育者の専門性、その確立や向上を図るシステムに関する研究(専門組織の活動や政策)を行っています。

木下 孝司 教授(発達心理学)

乳幼児期における自己と「心の理解」の発達を中心に、教示行為の発達と心の理論・実行機能との関連や、障害をもつ乳幼児の自己発達について研究しています。

國土 将平 教授(身体発育発達、保健体育科教育、健康・スポーツ測定)

日本やアジアの子どもの身体の発達や健康、体力・運動能力・運動動作の発達を計量学的に明らかにし、これらの相互作用を検証するとともに、教育・学習活動、生活環境や生活習慣の影響について研究しています。

五味 克久 教授(幼年音楽、リトミック、合唱指揮)

リトミック及び幼年音楽に関する研究です。どのような課題をどのように指導するか、といった事です。

鈴木 幹雄[※] 教授(図工・美術教育学、芸術教育に関連した教育学)

ヨーロッパの芸術教育学に関心があります。この点で、ナチズム期亡命者達によりアメリカにもたらされたヨーロッパの学問に関心があります。

目黒 強 准教授(児童文学、国語教育)

近代日本における児童文学という文学場の成立過程の検討を中心に、歴史社会学的観点から児童文学の研究に取り組んでいます。

※2017年3月で退職予定

■ 発達支援

現代社会における人間形成機能の社会的、教育的な開発支援を研究対象に、アクションリサーチを方法論とする実践的な研究を行います。

研究分野

伊藤 篤 教授 (子ども家庭福祉論)

地域における子育て支援の質を高めるための支援構造を、家庭のライフサイクル・被支援者のニーズやリスクの水準・支援主体間の協働・ファミリーリソースセンターモデルなどから検討します。

稲原 美苗 准教授 (ジェンダー理論、現象学、臨床哲学)

ジェンダーおよび障害・老いをめぐる問題を、ジェンダー理論、現象学、哲学対話などの方法を用いて多角的に解明し、哲学実践の可能性を探究しています。

清野 未恵子 特命助教 (自然共生社会、野生動物管理、ESD)

農山村地域における人と野生動物との共存に関する研究を軸としながら、持続的な自然共生社会の構築やそうした社会を担う人材育成に関する研究をしています。

津田 英二 教授 (生涯学習論、障害共生支援論)

障害に関する社会的課題を切り口として、インクルーシブな社会に向かって人々の学びの方法や過程を追究する実践的研究を行っています。

松岡 広路 教授 (生涯学習論、福祉教育・ボランティア学習論)

ESD推進の原理・システムを、生涯学習論及び福祉教育・ボランティア学習論の観点から考究し、ポスト近代教育の枠組みの構築を目指しています。

発達支援1年履修コース

職業人として高い成果を積み重ねてきた社会人を対象とした前期課程のコースです。このコースの学生は、発達支援に関する研究分野の教員の支援を受けて、アクションリサーチに取り組み、実践に即した研究能力を高めます。また、自分自身の職業経験に基づいて論文にまとめ上げることで、さらに高度に専門的な職業人としての能力を獲得することをめざしています。発達支援1年履修コースで学ぶ学生は、経験豊富な学校教員、保育士、地方公務員、ソーシャルワーカー、企業経営者、大学職員、カウンセラーなど、さまざまな領域で職業経験の実績を積んだ人たちです。

スタッフ

伊藤 篤 教授 (子ども家庭福祉論)

稲原 美苗 准教授 (ジェンダー理論、現象学、臨床哲学)

清野 未恵子 特命助教 (自然共生社会、野生動物管理、ESD)

津田 英二 教授 (生涯学習論、障害共生支援論)

松岡 広路 教授 (生涯学習論、福祉教育・ボランティア学習論)

人間環境学専攻

Department of Human Environmental Science

専攻長のメッセージ

人間環境学専攻は、人間の発達を促し、支え、助けるために、どのような環境を、どのように形成し、維持すればよいのか、という問いを立て、その解明に取り組んでいます。この課題に立ち向かうには、多様な分野からのアプローチが必要です。このため、本専攻では、自然環境、数理情報環境、生活環境、社会環境という各分野の専門知識をもとに、自らの切り口で、この課題に取り組みます。前期課程が目的とするのは、豊富な専門知識とそれを応用する能力、そして実践行動力を有し、人間環境のいっそうの改善のために活躍できる多様な人材の育成です。専門的な知識に加え、実践的な行動力をもち、政府、自治体、民間企業、NPOなどの多様な領域で活躍できる人材を養成します。後期課程は、人間環境に関する高度な専門学識と創造的な研究能力を備える自立した研究者、または研究能力に加えて実践的な教育開発能力をもつ大学教員などの養成を目的としています。さらに後期課程においては、より幅広く環境問題にアプローチするため、学外研究機関の研究者で構成される環境先端科学講座を設置しています。

人間環境学専攻長 平山 洋介 教授



■ 教育の特色

本専攻では、多様な学問分野を横断する幅広い研究視点や方法を身につけるとともに、専門分野に根ざした応用力、問題解決のための実践能力を養うための教育プログラムを採用します。

専門性を高める4つの履修コースと学際的研究を支援する教育体制

本専攻がテーマとする「人間の発達を促し、支え、助けるための環境」を解明するには、あらゆる方面からのアプローチが必要です。そのため、人間環境学専攻では、人間環境としての自然を対象とし、その成り立ちを明らかにしようとする「自然環境」、数理科学を基礎にして情報環境を研究対象とする「数理情報環境」、日常生活の状況から環境のあり方を追求する「生活環境」、社会環境に関する諸矛盾の克服を目指す「社会環境」という4つの履修コース（前期課程）と教育研究分野（後期課程）を設置しています。また、所属する履修コースや教育研究分野以外の授業の履修を可能とするなど、学生が研究課題に応じて、1つの分野に止まらずに、自分自身のコースワークを設定できるようにしています。

専攻共通科目の設置ときめ細かな指導体制

本専攻には、自由なコースワークを支え専門性を確保する仕組みが用意されています。そのひとつが、専攻共通科目の設定です。本専攻には、専攻共通科目「人間環境学相関研究」が置かれ、人間環境学に関する研究の視点や方法の多様性を学習するとともに、それぞれがとるべき研究上の位置や方向を理解できるようにしています。また、主指導教員1名、副指導教員2名の3名体制により、丁寧な指導が行われます。特に副指導教員は、その学生の研究内容に関連して他の学問領域から助言することが期待され、専門の枠にとらわれない独創性・創造性をもった研究を可能にします。

豊富な専門知識をベースとした多彩で実践的に行動できる人材の養成

本専攻では、包摂する学問領域の広さから、修了生は多彩な進路で活躍することが期待されます。いずれの進路をとるにせよ、人間環境にかかわる豊富な専門知識とそれを応用する能力をもとに、実践的に行動する力を有する人材になることを期待します。前期課程では、人間環境の改善のため、政府、自治体、民間企業、NPOなど多様な分野で活躍できる人材を養成します。後期課程では、人間環境に関する高度な専門学識と創造的な研究能力を備える自立した研究者、または研究能力に加えて実践的な教育開発能力をもつ大学教員などを養成します。

■ 教育研究分野

自然環境

自然環境分野では、自然環境に関わる物質、生命、地球表層から宇宙に至る幅広い事柄について、環境汚染、気候変動、生物多様性などの人間生活と密接に関係する環境問題に関して考究します。

研究領域

素粒子物理学、宇宙物理学、分子生物学、生物有機化学、分析化学、高分子化学、光合成酵素科学、植物生態学、進化生態学、環境地学、環境地球化学、水域生態学

数理情報環境

数理情報環境分野では、数理科学に対する高い専門性をもとに、多様化・高度化した情報環境について解析し、情報環境に関わる諸問題を解決するため、高度な数理的理論と手法について研究します。

研究領域

情報論理学、計算機代数、応用解析学、トポロジー、数理統計学、応用統計学

生活環境

生活環境分野では、私たちの生活環境を形成する生活空間、生活技術、生活資源の3領域において、加速度的に変化し続け、複雑化する諸問題を、社会科学、人文科学、自然科学の方面から考究します。

研究領域

衣環境学、感性工学、緑地環境学、環境バイオテクノロジー、環境経済学、食環境学、環境システム工学、生活空間計画、ヒューマンエレクトロニクス、バイオメカニクス

社会環境

社会環境分野では、経済学、政治学、歴史学、地理学、法学など従来の社会科学の研究成果を駆使できる基本的な能力とともに、人間が発達する環境としての社会のあり方を探求します。

研究領域

社会文化環境論、社会保障、社会政策、途上国政治経済、社会規範論、人文地理学、地域社会論、社会思想、都市地理学

環境先端科学（後期課程の連携講座）

体系的教育を行う大学院と環境科学の先端的研究を推進する中核的研究機関の連携を通じて、次代の環境科学について探求します。

研究領域

大気化学、炭素循環、生物地球化学、マイクロ流体工学、環境分析化学、ナノバイオ計測工学

■ 取得可能な資格免許

中学校教諭専修免許状（理科、数学、家庭、社会）、高等学校教諭専修免許状（理科、数学、家庭、公民）



■ 自然環境

自然環境分野では、自然環境の成り立ちや、環境と人間の相互作用に関する基礎的研究を行う能力を有し、自然科学的立場から人間環境の具体的諸課題の解決を目指す人材を養成します。そのために、自然環境に関わる物質、生命、地球表層から宇宙にいたるまでの幅広い事柄について、基礎的な理解を深めるとともに、環境汚染、気候変動、生物多様性などの人間生活と密接に関係する環境問題に関して深く考究します。

研究分野

青木 茂樹 教授 (素粒子・宇宙線物理学)

ニュートリノ振動実験や宇宙ガンマ線の観測などの研究をしています。

蘆田 弘樹 准教授 (光合成酵素、代謝制御学)

植物や藻類の光合成機能の解明を行い、その成果を環境問題解決へ応用しています。

伊藤 真之 教授 (宇宙物理学、科学教育)

人工衛星等によって得られるデータを用いた宇宙の観測的研究や地域社会における市民科学活動支援システムの構築に関する研究をしています。

丑丸 敦史 教授 (植物生態学、生物多様性科学)

送粉者による花形質の進化の解明を目指し、送粉ネットワーク構造や水田生態系における希少種 (半自然草地の草本、カエル類) の分布特性の解析も行っています。

榎本 平[※] 教授 (分子生物学)

高増殖性・高重油生産性を有する重油生産藻類 *Botryococcus braunii* の開発に関する研究や遺伝子クローニング技術の開発を行っています。

江原 靖人 准教授 (生物有機化学)

遺伝子を構成している核酸塩基を改変した人工核酸を合成し、試験管内高速進化法と組み合わせることにより、がん細胞、ウイルスを標的にした新しい核酸医薬を創製しています。

蛭名 邦禎[※] 教授 (環境物理学、理論生命科学)

地球システムと生命システムの時間発展ダイナミクスのモデル化と、それに基づく地球環境理解に取り組んでいます。

大串 健一 准教授 (地球環境、環境地学)

地球環境変動のメカニズム解明に向けた古環境研究を行っています。

齊藤 恵逸[※] 教授 (分析化学)

化学発光・蛍光を利用した物質の分析法、有機試薬を用いたイオン選択性電極の開発、ストレスマーカー測定法の開発に取り組んでいます。

佐藤 春実 准教授 (高分子化学、環境調和型高分子)

環境にやさしい生分解性高分子の構造と物性について、主に振動分光法とx線回折法を用いて研究を行っています。

高見 泰興 准教授 (進化生態学)

生物多様性と進化に関わる性淘汰と種分化のメカニズムについて、野外調査、行動実験、形態解析、DNA解析などを組み合わせて研究しています。

寺門 靖高 教授 (環境地球化学)

河川水、生物が作る鉱物、地殻を構成する岩石・鉱物などの様々な地球表層物質についての元素濃度や同位体組成を用いた地球環境の地球化学的研究を行っています。

源 利文 特命助教 (水域生態学、環境生理学)

人間活動を含む広い意味での生態学・環境生理学に取り組んでいます。環境DNAなどの新しい技術や、動物生理学などを組み合わせて総合的に研究します。

※ 2017年3月で退職予定

■ 環境先端科学 (後期課程の連携講座)

体系的教育を行う大学院と環境科学の先端的研究を推進する中核的研究機関の連携を通じて、次代の環境科学を担う人材を養成します。

研究分野

斉藤 拓也 准教授 (大気化学、生物地球化学)

オゾン層破壊や温暖化に関わる大気中のガス状有機物について、熱帯植物など自然界からの放出量やその変動メカニズムを理解するための研究に取り組んでいます。

遠嶋 康徳 教授 (大気化学、炭素循環)

大気中酸素量の僅かな変化を測定し、二酸化炭素の変化との比較から、地球表層での炭素収支や大気-海洋間のガス交換の解明に係る研究を行っています。

永井 秀典 准教授 (マイクロ流体工学)

単一細胞から遺伝子を高速に増幅する技術や、イムノアッセイ及び電気泳動等の分析技術をオンチップ化したマイクロ分析システムに関する研究を行っています。

脇田 慎一 教授 (環境分析化学、ナノバイオ計測工学)

ナノバイオテクノロジーを利用したバイオセンサやマイクロ流体デバイスの研究開発と環境汚染や生体ストレス応答モニタリングの実証研究に関する研究を行っています。

■ 数理情報環境

数理情報環境分野では、数理学に対する高い専門性を身に付け、情報環境の多様化・高度化に対応して情報に関わる諸問題に有効な解決策を提供することのできる人材を養成します。そのために、伝統的な数学に根ざしてはいるが、特に情報環境に関わる諸側面の解明に有効と思われる数理学の諸分野を重視した授業科目を通して、複雑に入り組んだ情報環境に対処するための高度な数理的理論と手法を身につけます。

研究分野

稲葉 太一 准教授 (数理統計学、応用統計学、データ解析)

統計手法は、その適用分野によって異なる側面があります。例えば医学統計の分野では、多重比較法という手法があり、その適用範囲を広げる事を研究しています。

桑村 雅隆 教授 (応用解析学)

物理学、化学、生物学などに現れる非線形微分方程式を分岐理論や力学系理論とコンピュータシミュレーションを利用して調べています。

阪本 雄二 准教授 (数理統計学)

ポアソン過程や拡散過程などの確率過程に関して、その漸近分布論と統計的漸近理論、及びその数理ファイナンス・保険数理への応用の研究を行っています。

高橋 真 教授 (情報論理学)

無限プール代数のゲーム論的性質及びモデル検査ツールを用いたシステムの信頼性検証について研究をしています。

長坂 耕作 准教授 (計算機代数)

数式処理の理論研究 (主に数値・数式融合計算) とその効率的な実装方法や情報システム (主に数式処理システム) を活用した他分野への展開について研究しています。

宮田 任寿 教授 (幾何学的トポロジー)

Shape 理論 (局所的に複雑な図形や空間への幾何学的なアプローチの方法) とその応用、距離空間の幾何学性質 (次元論など) について研究しています。

■ 生活環境

現代は「流動化」の時代などと呼ばれます。いいかえれば現代とは加速度的に変化し続ける時代でもあります。そこでは日常の生活さえ刻々と姿を変えており、日々新たな課題が生じています。そこで生活環境分野では、私たちの生活環境を形成する生活空間、生活技術、生活資源の3領域について、社会科学、人文科学、自然科学と、文系・理系の両方にわたる研究手法を駆使して、今日的な課題を取り上げ、分析し、問題解決する能力を養成します。

研究分野

井上 真理 教授 (衣環境学、感性工学)

布の風合い (触感)・衣服圧・衣服内気候を、材料特性から実験的、理論的に解析し、着心地の良さをもたらす製品を設計、提案する研究を行っています。

大野 朋子 准教授 (緑地環境学、造園学)

人間活動と植物との関係性を探求し、人が関わった景観の形成とあり方について研究しています。

近江戸 伸子 教授 (環境バイオテクノロジー)

イネ科、マメ科、アブラナ科植物、バイオエネルギー植物を対象にした植物環境学ならびに植物の新機能の開発、器官分化についての細胞・ゲノム・染色体・遺伝子の研究を行っています。

佐藤 真行 准教授 (環境経済学、ライフスタイル論)

環境・資源制約のもとでの経済システムと、そのときの人々のライフスタイルの分析を中心に、生活の質と社会・環境・経済の持続的発展について研究しています。

白杉 直子 教授 (食環境学)

茶園をフィールドとした農地の多施肥による地下水の窒素汚染低減化、及び有機酸の塩味増強・抑制効果 (ハエ味細胞を用いた電気生理学実験による評価) の研究を行っています。

田畑 智博 准教授 (環境システム工学)

地域、個人等、様々なレベルにおける社会・経済活動とそれが及ぼす環境影響を体系的に解析し、持続可能な社会を構築するための手法論を開発するとともに、実学への展開方法を提案する研究を行っています。

平山 洋介 教授 (生活空間計画)

住居からコミュニティ、都市にいたる生活空間をどのように構想すればよいのか、という問題を理論と実証の双方から考えています。

福田 博也 准教授 (生体電子計測、ヒューマンエレクトロニクス)

温度・湿度・光強度といった環境要因をコントロールした生活空間において、いろいろな環境刺激に対する人や植物の生体電位応答について研究しています。

矢野 澄雄 教授 (振動工学、バイオメカニクス)

日常生活動作を力学的に分析。身体機能・特性の計測。福祉・介護や健康科学関連の機器・用具の開発。経験やノウハウを形にする研究を行っています。

■ 社会環境

現代社会の諸課題を解明するには、既存の社会諸科学の成果だけでは不十分です。現代社会のあるべき方向を模索するためには、一人ひとりの人間の発達を基軸にすえながら、世界規模で進む歴史的な変動のダイナミズムを明らかにするための新しい科学が求められています。そこで社会環境分野では、経済学、政治学、歴史学、地理学、法学など従来の社会科学の研究成果を駆使できる基本的な能力とともに、人間が発達する環境としての社会のあり方を探求できる実践的な構想力を育成します。

研究分野

浅野 慎一 教授 (社会文化環境論、社会学)

国境を越えて移動する人々を主な対象として、歴史に翻弄されながらも、自ら主体的に新たな歴史を創り出す諸個人の生活や行為について研究しています。

井口 克郎 講師 (社会保障、福祉国家、災害被災者の生活問題)

医療・福祉サービスを必要とする人々と、社会保障制度の下でそれをになう医療・福祉労働者の双方の人権を保障しうる社会保障制度のあり方について研究しています。

岩佐 卓也 准教授 (社会政策)

新自由主義的な制度改革と社会編成が進行するなかで、雇用のルールはどのように変容してきているのか、賃金問題などを焦点に研究しています。

太田 和宏 准教授 (途上国政治経済)

グローバル社会の抱える諸問題を発展途上国に焦点を当てて研究しています。特に開発政策と政治構造のあり方について検討しています。

岡田 章宏 教授 (社会規範論、イギリス統治構造論)

近現代におけるイギリス地方自治の形成と展開を検証しながら、この国の特質である住民自治をとおして公共性の内実と実現形態を検討しています。

澤 宗則 教授 (人文地理学、地域社会論)

グローバル化にともなう地域社会の変容、特に開発途上国インドの農村の変化、先進国の移民社会の形成について、人文地理学の視点から理論的かつ実証的に研究を行います。

橋本 直人 准教授 (社会思想、社会学史)

近代の内在的批判を主題として、M. ウェーバーの社会理論の形成過程、またフランクフルト学派とポスト・コロナル思想との連関を研究しています。

山崎 健 教授 (都市地理学)

日本及び中国の大都市・大都市圏の地域空間構造の形成と変容について、地理学的手法を用い、理論的・実証的両側面から考察研究を行っています。

プロジェクト研究

人間環境学専攻では、様々な環境問題に対し資源保全や生態系などの多様な分野からアプローチしています。

研究分野

古川 文美子 特命助教 (地域資源保全)

植林活動によるマングローブ再生を生態系修復という視点だけでなく、地域社会の営みの中で成立する二次的自然環境として再評価することを試みようとしています。

源 利文 特命助教 (水域生態学、環境生理学)

人間活動を含む広い意味での生態学・環境生理学に取り組んでいます。環境DNAなどの新しい技術や、動物生理学などを組み合わせて総合的に研究します。

修士論文と博士論文

■ 修士論文 (最近の修士論文の抜粋です)

人間発達専攻

こころ系

- 幼児をもつ母親の被援助志向性と育児サポートの検討
- 中学生の歯科保健行動とその関連要因—心理社会的要因に焦点をあてて—
- 在日留学生の異文化適応に関する研究
- 中国中学生の喫煙行動の実態及びその関連要因について
- 青年期の自己定義記憶と自我同一性との関連
- 思春期の子どもを持つ母親の被援助志向性に関する一考察
- 幼児期における読み困難予測材料としての色の呼名課題有用性の検討
- 自助グループにおいて当事者の経験はどのような意味をもつか—摂食障害の自助グループから—
- 青年期における親子関係の変化が与える影響について
- 小学生の認知する教師の勢力資源—児童の学校享受感からの検討—
- 健常高齢者の内的世界に関する一考察—d-MSSMで表現された人生のテーマに着目して

表現系

- 装飾的デザインとしての周期パターンの生成およびその印象評価
- 現代ファッションにおける「男らしさ」の理想像の変遷—雑誌『ポパイ』を中心に—
- 無調性音楽の聴取印象および難易性評価に関する研究
- 表現運動における「コンタクト・ダンス」教材化の試み—小学校高学年を対象としたコンタクト・ワークを導入した授業実践を通して—
- 住宅における演奏会—住み開き演奏会の構造に関する考察—
- 大正・昭和戦前期における熊澤鷹二の活動に関する研究—写真表現における理念の変容に着目して—

からだ系

- 視覚情報が歩行中の障害物跨ぎ動作における姿勢の安定性とクリアランスに与える影響
- 下肢人工関節患者へのツアープログラムが身体活動に及ぼす影響に関する研究
- 歩行中の障害物またぎ動作における位置知覚しているつま先の高さと実際のつま先の高さとの誤差に関する研究
- 複線経路・等至性モデルによる総合型地域スポーツクラブの自立過程に関する研究

学び系

- 東井義雄実践における教育目的—「形成者」と「ひとりひとり」に着目して
- 小学生における生態系の理解に関するラーニング・プログレッション
- 教師の中年期の危機—教員文化に着目して—
- 動物園来園者の科学的観察を支援する紙芝居
- 小学校国語科における「伝記」教材の授業開発—「伝記」のジャンル特性に着目して
- 小学校中学年児童の全力疾走における走動作の特性
- 幼児の概念的サビタイジングに関する研究
- 1～2歳児における自己調整の発達の変化—対人葛藤場面における相互交渉に着目して—
- 幼児の共同画制作過程における相互交渉とその影響—同年齢ペアと異年齢ペアの比較—
- グローバル化時代における内モンゴルの少数言語話者のアイデンティティ形成に関する研究
- 子育て支援施設を利用する保護者の「親育ち」に関する研究

人間環境学専攻

自然環境

- 国際宇宙ステーションにおけるアラニンの化学進化研究および紫外線線量計の開発
- 硫黄を含む有機試薬の合成とその分析化学的研究
- 流路UV照射を用いた窒素含有化合物のルミノール化学発光検出法の開発
- 金ナノ粒子を用いたインフルエンザウイルスの検出
- 「かぐや」搭載ARDデータによる月面の²²²Rn α線の研究
- *Botryococcus braunii* における遺伝子の導入と発現の試み
- 交尾器形態の多様化をもたらす性淘汰の検出
- トリス (2,2'-ビピリジン) ルテニウム (III) 錯体の化学発光を用いたホモシステインおよびホモシスチン分析法の開発
- エマルション望遠鏡による Vela pulsar 位相分解観測のためのタイムスタンパーに関する研究開発
- レクテンを特異的に認識する人工核酸の設計と合成

数理情報環境

- 直交不変推定量を用いた線形判別関数の漸近展開
- 偏微分方程式の数値的解法について
- 2つのパラメーターをもつ常微分方程式の解の分析について
- 対話型証明系とゼロ知識証明—NPに属する問題のゼロ知識証明について

生活環境

- KINECT センサを用いた歩行情報探知の検討
- 家庭の耐久消費財に着目した潜在的な災害廃棄物発生量の推計方法の提案
- 繊維組成や紡績条件が糸の物理特性に及ぼす影響
- 減肥が緑茶中のカテキン含量に及ぼす影響
- 24時間定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業の追跡研究
- 留学生における対人ネットワークとソーシャルサポートとの関係

社会環境

- 日本における高齢者コミュニティケアの現状—地域包括ケアシステムを中心に—
- 父母の国で一永住帰国後の中国残留日本人二世—
- 中国大都市における社区在宅養老サービス—上海市を対象として—
- 中国対アフリカ援助の独自性—「発展指導モデル」に関する研究
- 中国人留学生の帰国後の労働・生活・意識—山東省を中心として—
- 在日中国人留学生のストレスと人間発達—日本語学校在学生を対象として—

博士論文 (過去2年間の博士論文です)

人間発達専攻

2015年度

- 現代社会における女性のストレスとそれに及ぼす食事制限の効果
- 臨床場面における反復される語りに関する研究—ナラティブアプローチの視点から—
- 岡山県私設小学校教員養成所の研究—戦前日本における私立学校による小学校教員養成事業—
- 障害支援の関係論的研究—専門家像の脱構築試論—
- 行動変容理論からみた中高齢者の身体活動とセルフ・エフィカシーに関する研究
- 青少年期における社会的スキルの発達にスポーツ活動が及ぼす影響
- スポーツクラブにおける若者ボランティア指導者のマネジメントに関する研究
- 成人のスポーツライフに影響を与える要因とプロモーション事業に関する研究
- セルゲイ・プロコフィエフの音楽の暗号と芸術性—《ピアノ・ソナタ》におけるラインとコードのアナグラム—

2014年度

- TAT における時間性の検討—ナラティブ・アプローチの立場から—
- 幼児は「誰の」気持ちかわかるのか? : 情動推測における人称性認識の発達の变化
- 少年の非行の開始・継続・停止に影響を及ぼす心理的要因についての研究
- 母子保健における臨床心理学的アプローチの応用—子育て・子育て支援と援助環境の心理アセスメント—
- 幼児期の描画における表象理解の発達—描画意図と他者理解に着目して—
- 有機農業の担い手形成に関する一考察—H 県 TG 地方における事例研究から—
- 短距離走クラウチングスタートにおけるスターティングブロックへの力発揮からみたブロッククリアランス動作に関する研究
- 人工膝関節置換術後の歩行変動と膝関節における衝撃吸収能力
- ジャン＝パティスト・カルポーの彫刻に関する考察 カルポーの二面性とその形成について

※人間発達環境学研究科は2013年4月に、旧4専攻(心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻)を改組し、人間発達専攻を設置しました。
人間発達専攻のリストには、旧4専攻の博士論文を含みます。

人間環境学専攻

2015年度

- 蛍光性配位子を含む銅及びコバルト錯体の合成と還元剤分析への応用
- 残留日本人二世等の生活と社会意識に関する研究
- ガンマ線天体観測のためのエマルジョン望遠鏡システムの開発と2015年豪州気球実験の実現化
- 石灰岩中の希土類元素などの微量元素存在度に関する地球化学的研究
- 老人福祉施設への環境適応におけるリーフ緑茶活用に関する研究

2014年度

- A study of mechanisms of biodiversity declines due to land-use changes in agricultural ecosystems (農業生態系における、土地利用形態の変化が引き起こす生物多様性低下のメカニズムに関する研究)
- ハロ酸脱ハロゲン化酵素 L-DEX YL の反応機構の解析と機能改変酵素のデザイン
- 一般在宅高齢者における筋力トレーニング行動開始への介入アプローチ—生活環境重視型システム (MuSSLE) を用いて—
- オゾン—アルケン反応系での syn/anti-Criegee 中間体を識別した OH ラジカル生成に関する研究

進路・資格免許

■ 前期課程修了生の主な進路

人間発達専攻

2015年度【就職】

オリンパス、河北省邢台学院、公益社団法人 関西経済連合会、神戸大学附属小学校教員、社会福祉法人 平安徳義会 乳児院、日工、ニプロ、日本ベーリンガーインゲルハイム、パナソニック、阪急阪神百貨店、ミズノ、ランドブレイン、小学校教員（大阪市、京都市、兵庫県）、中学校教員（京都市）、大阪少年鑑別所、大阪府警察、大阪府職員、市職員（大阪市、京都市、神戸市）、兵庫県中央こども家庭センター

【大学院後期課程進学】

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 5名

2014年度【就職】

あんしんクリニック、エービーシー・マート、大阪少年鑑別所、シャープ、社会福祉法人 三光事業団、JAL インフォテック、城西病院、高見、つぎほの甘み、トッパン・フォームズ、日中文化産業振興、パソナ、阪南病院、平谷こども発達クリニック、Miki Museo スタジオ、ミュゼふくおかカメラ館、明石市立高齢者大学校あかねが丘学園、公益財団法人 兵庫体育協会、小学校教員（大阪市、神戸市、兵庫県、広島県）、幼稚園教員（神戸市）、市職員（川崎市（心理職）、神戸市、橋本市、箕面市（心理職））、兵庫県職員

【大学院後期課程進学】

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 4名

人間環境学専攻

2015年度【就職】

アクションチュア、アコム、アルプスシステムインテグレーション、大阪ガス、海遊館、一般財団法人 化学及血清療法研究所、金蘭千里中学校・高等学校教員、三田学園中学校・高等学校教員、ジェーシービー、ジャステック、新日鉄住金ソリューションズ、住友電工情報システム、西部ガス、宝酒造、テイエルブイ、東洋埠頭、成田国際空港、日本アイ・ピー・エム・サービス、日本ケミファ、野村総合研究所、浜学園、ファイン、三菱日立パワーシステムズ、村田製作所、ライズエージェンシー、ILS、高校教員（大阪府、兵庫県）、中学校教員（兵庫県）

【大学院後期課程進学】

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2名

2014年度【就職】

アップ、医歯薬ネット、インテリジェンス、VSN、グッドライフ OS、ゲンゼ、大正製薬、中国空間技術研究院、徳潤、ニッセイ情報テクノロジー、日本製紙、扶桑化学工業、山田養蜂場、ロングライフホールディング、一般社団法人 徳島新聞社、高校教員（兵庫県、和歌山県）

【大学院後期課程進学】

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 3名、京都大学大学院情報学研究科 1名

■ 資格取得状況

人間発達専攻

2015年度 小学校教諭専修免許状 8名、中学校教諭専修免許状（音楽）1名、中学校教諭専修免許状（美術）1名、中学校教諭専修免許状（保健体育）1名、高等学校教諭専修免許状（音楽）1名、高等学校教諭専修免許状（美術）1名、高等学校教諭専修免許状（保健体育）1名

2014年度 幼稚園教諭専修免許状 3名、小学校教諭専修免許状 7名、中学校教諭専修免許状（理科）1名、中学校教諭専修免許状（保健体育）1名、高等学校教諭専修免許状（理科）1名、高等学校教諭専修免許状（保健体育）1名

人間環境学専攻

2015年度 中学校教諭専修免許状（家庭）1名、中学校教諭専修免許状（数学）4名、中学校教諭専修免許状（理科）9名、高等学校教諭専修免許状（家庭）1名、高等学校教諭専修免許状（数学）5名、高等学校教諭専修免許状（理科）10名

2014年度 中学校教諭専修免許状（数学）5名、中学校教諭専修免許状（理科）5名、高等学校教諭専修免許状（数学）5名、高等学校教諭専修免許状（理科）5名

キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科は、専門教育を基盤とし学生一人ひとりのキャリア形成支援を積極的に行っています。

キャリア・デベロップメント・アドバイザーを配置し、学生が自らの専門性をどのように社会に生かしていくかを考え、そのために必要な学びや行動を実践していく過程を支援します。

入試日程・データ

2017年度入試日程一覧

博士課程前期課程

専攻・コース	募集人員	出願期間	試験期間	合格発表	入学手続期間
人間発達専攻 (1年履修コース以外)	51人	2016年8月3日～9日	2016年9月15日・16日	2016年10月7日	2017年3月中旬予定
人間環境学専攻	36人	2016年8月3日～9日	2016年9月15日・16日	2016年10月7日	
人間発達専攻1年履修コース	4人	2016年12月1日～7日	2017年1月7日・8日	2017年1月23日	

(注)・募集人員は、社会人特別入試若干人及び外国人留学生特別入試若干人を含む。
・人間発達専攻(1年履修コース以外)の募集人員51人は、臨床心理学コースの募集人員10人程度を含む。

博士課程後期課程

専攻	募集人員	出願期間	試験期間	合格発表	入学手続期間
人間発達専攻	11人	2017年1月20日～26日	2017年3月3日	2017年3月8日	2017年3月中旬予定
人間環境学専攻	6人	2016年7月19日～25日	2016年8月25日	2016年9月14日	
		2017年1月20日～26日	2017年3月3日	2017年3月8日	

(注) 募集人員は、進学者及び外国人留学生特別入試若干人を含む。

志願者・合格者・入学者数

博士課程前期課程

専攻・コース	2016年度			2015年度			2014年度		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
人間発達専攻 (1年履修コース以外)	89人	54人	48人	117人	60人	54人	128人	55人	48人
人間環境学専攻	44人	37人	33人	46人	42人	35人	50人	43人	41人
人間発達専攻1年履修コース	6人	4人	4人	10人	5人	5人	7人	4人	4人

(注)・2015年度以前の募集人員は、人間発達専攻(1年履修コース以外)52人、人間環境学専攻40人、人間発達専攻1年履修コース4人。
・2016年度の人間発達専攻志願者数は、第2次募集の人数を含む。

博士課程後期課程

専攻	2016年度			2015年度			2014年度		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
人間発達専攻	17人 [6人]	11人 [5人]	11人 [5人]	18人 [6人]	13人 [4人]	13人 [4人]	20人 [5人]	12人 [5人]	12人 [5人]
人間環境学専攻 (Ⅰ期・Ⅱ期合計)	8人 [3人]	8人 [3人]	6人 [2人]	4人 [3人]	4人 [3人]	4人 [3人]	8人 [4人]	8人 [4人]	7人 [3人]

[]内は本研究科博士課程前期課程からの進学者数

学生募集について

募集に関する詳細は以下に掲載しています。

【博士課程前期課程】<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/1244>

【博士課程後期課程】<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/1246>

入試に関する問い合わせ

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教務学生係

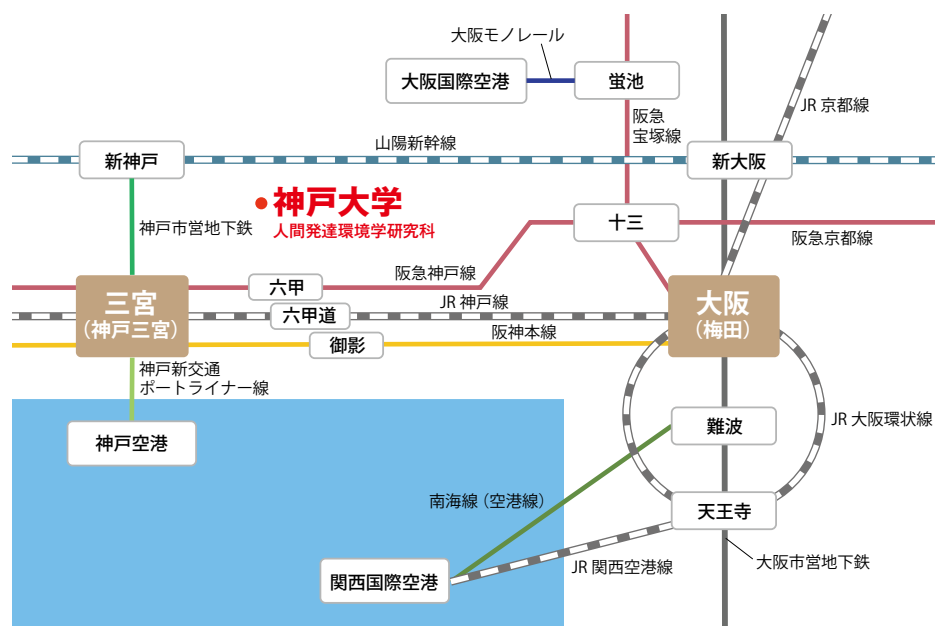
メール：hudev-kyomu@office.kobe-u.ac.jp

電話：078-803-7920

沿革

1874年 10月	兵庫県師範伝習所設置
1877年 1月	神戸師範学校と改称
1886年 4月	兵庫県尋常師範学校と改称
1898年 4月	兵庫県師範学校と改称
1900年 2月	兵庫県第二師範学校を設置
1900年 4月	兵庫県師範学校を兵庫県第一師範学校と改称
1901年 8月	兵庫県第一師範学校を兵庫県御影師範学校と改称 兵庫県第二師範学校を兵庫県姫路師範学校と改称
1902年 2月	兵庫県明石女子師範学校を設置
1919年 4月	兵庫県立農学校甲種別科を設置
1923年 3月	兵庫県立農業補習学校教員養成所として兵庫県立農学校甲種別科が独立
1935年 6月	兵庫県立農業補習学校教員養成所を兵庫県立青年学校教員養成所と改称
1936年 4月	兵庫県御影師範学校と兵庫県姫路師範学校を兵庫県師範学校として統合
1943年 4月	兵庫師範学校として兵庫県師範学校と兵庫県明石女子師範学校を包括し官立移管
1944年 4月	兵庫青年師範学校として兵庫県立青年学校教員養成所を官立移管
1949年 5月	兵庫師範学校と兵庫青年師範学校を統合し神戸大学教育学部として発足
1965年 4月	神戸大学教育専攻科を設置
1981年 4月	神戸大学大学院教育学研究科修士課程を設置
1992年 10月	神戸大学教育学部を改組し、神戸大学発達科学部を設置
1997年 4月	神戸大学発達科学部と神戸大学国際文化学部を基礎とした神戸大学大学院総合人間科学研究科修士課程を設置
1999年 4月	神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程を設置
2005年 4月	神戸大学大学院総合人間科学研究科発達支援インスティテュートを設置
2007年 4月	神戸大学大学院総合人間科学研究科を改組し、神戸大学大学院人間発達環境学研究科を設置
2013年 4月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科の4専攻を改組し、人間発達専攻を設置

アクセス



■ 最寄り駅からのアクセス

最寄り駅は、阪急電車「六甲」駅、JR「六甲道」駅または阪神電車「御影」駅。

最寄り駅から神戸市バス 36 系統「鶴甲団地」行に乗車、「神大発達科学部前」で下車。



神戸大学大学院 人間発達環境学研究科

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11

TEL 078-803-7924(教務学生係)

<http://www.h.kobe-u.ac.jp/>